Strike!

蜂蜜@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔｒｉｋｅ！

【Ｎコード】
Ｎ４３８１Ｄ

【作者名】
蜂蜜@

【あらすじ】
水野李玖（みずのりく）は、どこにでもいる平凡な男子中学生。ある日朝起きると男から美女になっていて・・・・！？お知らせ★１９＆２０話ＵＰしました。

プロローグ　始まりの朝（前書き）

Ｓｔｒｉｋｅ！とはストライク、と読みます。検索でもストライクでも出ますよ～（あんまり関係ない・・・

プロローグ　始まりの朝

チョコレートは甘い。

甘いだけがチョコレート。

チョコレートって甘えてるみたいで好きじゃない・・・・・

ピピピピピピピピピピピピーーーーーーーーーーーーーー！

「うるさい・・・・」俺・・・――――水野李玖（みずのりく）は、貴重な睡眠時間をめざまし時計に邪魔され、うるさく鳴っているめざまし時計の音を勢いよく止めた。

カチッ

「ふー・・・」ふただび俺はごろんと横になった。気持ちいい・・・布団は好きだ。なぜだかは知らないけど。なんか気分がめざましのせいですっかり悪くさせられたので軽く伸びる事にした。

「んー・・・」手と足を軽く伸びる。さらさらと長い髪が手にあたる。

「ん？」違和感。

俺の髪は短いはず・・・・。だって男だし。なのに長い髪って・・・女でもあるまいし。

俺は数秒固まった。

何だ・・・身体が痛い。とくに太もも。これって筋肉痛？

昨日は運動とかしたけど・・・・筋肉痛なんてなった事ないのに！

どうしちゃったんだろ、俺・・・

とりあえず身体を起こした。その時、二の腕の激しい痛み。

「いてっ！痛すぎ・・・・筋肉痛は恐ろしいな・・・」

そろそろと歩き、シップを探した。

「どこだどこだーシップ～。お・あったあった」

シップを痛いトコに貼る。ヒヤヒヤー、と気持ちいい冷たさ。

そして洗面所へと向かう。朝の歯磨きだ。これでも俺は歯を大切にする男なのだ。

「・・・・・・・・・・・なんだ？」

鏡に映る美女は俺を見つめていた。不思議な顔で。

俺がジャンプすると、美女もジャンプ。そして手をブルブルと動かすと美女も真似る。鏡側で俺の真似をしているみたいだ。もしかして俺？いや、違うだろ。女じゃないし・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああああああああああああっっ！」

「どしたっ！姉ちゃんっ！」

こいつは妹の由愛（ゆめ）だ。大阪弁混じりの女で、なんか性格悪いけど可愛い顔してる奴って・・・ん？

「は？姉ちゃん？」

「何言ってんのさーっ！あんたはウチの姉ちゃんやろー！」

「なんだそれ・・・違うだろ・・・由愛・・・ねぇちゃんじゃなくて・・・あっ！」

今は女なんだった。

「ちょっとどないしたん？大丈夫か？え？」

「あーーーハイハイハイ大丈夫だって！由愛は気にしなくていい！」

「・・・・・？うん？」

「じゃ、ゴハン食べよーっ」

こんな事話しても分かってもらえないだろうな・・・・由愛(コイツ)。幽霊とか信じないタイプだし。俺は歩きながら考えていた。でも、いつになったら戻るんだろ・・・。ずっとこのままじゃ、不便だし。お風呂とか、トイレとか・・・・ん？

俺は胸をバッと触ってみた。

「・・・・・・無い」

全然ペッタンコだ。女になった意味ねーし。

「・・・・？やっぱ変ー・・・それとも欲求不満か？え？」

「んな訳ねーだろっ／／／ってかいつまで見てんだよ／／／／」

由愛(コイツ)・・・油断も隙もあったもんじゃない・・・・っ

「まーどーでもいいけどさー・・・いつまでその口調で話してんのさー・・・ま・姉ちゃんは黙ってりゃ、美人だけどしゃべると男じゃん？直した方がいいよー」

「うるさいなー・・・・／／／／分かってるっつの」また変なトコ見られたらどーしよ／／／

「李久ーっ、由愛ーっ、ゴハンよ～早く来なさいねー。今日は新学期なんだから」

「あー・・・そういえばそうだった・・・・冬休みまた来ないカナー・・・・」

「姉ちゃんそんな事言ってないでっ。早く行くよ～」

「ん？あぁ」

俺と由愛はキッチンへと向かったのだった。

プロローグ　始まりの朝（後書き）

李玖は以外と平気そうダナー・・・　&ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

1話　新学期

新学期・・・――――。

ある意味、生徒達には嫌～な日である。わざわざ早起きして、制服きてイチイチ学校に行かなければならないという日だ。

当然俺も行きたくない。

「ふぁああ～眠っ～～～」

「ほらー李玖(りく)っ。早く食べてしまいなさい。冷めるわよー」母さんは何事もないようにパタパタと動き回っていた。

「そーそ。姉ちゃんただでさえ朝苦手なんやし」

「だってさぁー・・・学校の為に早起きすんのってダリーじゃん？な・そう思うよな！由愛(ゆめ)っ」

「・・・・怠け者」

「うっせーっ！これでも忙しいんだよっ」

「いいかげんその喋り方止めたらー？男みたいやよー」

「おまっ・・・・さりげなくスルーすんなよっっ」

「姉ちゃんだってー」

「まーまーその位にしてっ。食べたら学校行きなさいよっ」

「「うるせーっ」」

「なんか行った？」と、凄い眼つきでギロリ。

「「いっ・・・いえ！」」

俺らはなんか知らないけどもくもくと朝食を食べるのに集中した。

それにしても・・・・・

母さん達は（つまり由愛とか友達とか）俺の男だった時の事覚えているのだろうか？

覚えてるよな・・・・多分・・・・・

「な・母さん、由愛」

「何？」「なんや？用件は手短にね」

「お前ら・・・俺が男だった事覚えてるか？」

「「・・・・・・は？」」二人でハモル。

「だからー！俺が男だった事覚えてるか？なんか朝起きたらこんな姿（オンナ）になっちまったんだよ！」俺は少々キレぎみで説明する。俺だって一応混乱してるんだからな！

真剣な俺にたいして二人は一瞬黙りこんだ。

だが・・・・・

二人は同時にふきだして笑い始めたのである！

「なっ・・・・なんだよ母さん、由愛！笑うなよっ！俺だって本気なんだぞ！」

「はいはい・・・あんたの言いたい事は十分分かったから早く食べて学校いきなさい。でないと遅れるわよ、新学期なのに」母さんは笑いをこらえながらも俺を馬鹿にしたような口調でサラリと話題を受け流した。それに由愛も付け足すように言う。「そーそ。今日、何か変やと思ってたらそのせいやったんか。頭でも打ったんちゃう？」

「なっ・・・・」

「そうそう！気にしない気にしない！」母さんは俺に構ってられんといわんばかりに家事を続行した。

「気にしない奴がいるかよっ！」

「何かご不満でも？」と、ギロリ。その眼つきが酷く、恐ろしいモノだったので俺はすぐさま「いぇっ！」と言い、もくもくと朝食を口に運んだ。

ああ、悲しいな、俺・・・こんなに弱いんだ・・・・。

「じゃなくてー、お母さんが恐いんちゃう？」

「うわっ！勝手に人の心の中読むなよ！由愛っ！」

「きょほほほほ～」

「何気に誤魔化すなっしかも気持ちの悪い笑い声だすなよ～」

「早く食べなさいっ！遅れるわよっ！！」と、またもやギロリ。

「はい・・・・」

二人（おれたち）は縮こまり、必死に朝食を食べた。

＊

「何年何組・・・・あー学年は同じだったかー」李玖は玄関に張り付けられた組が書かれた紙を見ながらぼやいていた。毎年クラス変えがあるので新学期は皆ドキドキしている。ちなみに今年で中2だ。すると肩を軽く叩かれた。振り向くと自分より頭一つ分くらい低い中性的な女の子が立っていた。（ちなみに顔も中性的）

「あ・水野さんって2組だよね～アタシもなんだ！一緒に行かない？」

「え・そうなんだ・・・2組なのか～自分は。初めてなったなー2組・・・」ぼやや～っ、マイ・ワールドに入ってると女の子が「おーい」と声をかけてきた。

「水野さん？」

「あ・御免御免・・・・ＯＫ。えと・・・」

「菊来紅葉（きくらもみじ）よ！宜しくね、水野さん。あ・李玖ちゃんって呼んでいいかな？」それだけいうとニコリと笑った。うわ、可愛いかも。

落ち着け！俺！

ドキドキしている心を落ち着かせる為深呼吸。うん。だいぶ楽になった・・・。

「よ、宜しくな～。あと、いいよ。ちゃん付けで」

「ありがと。じゃ、行こうか」

「あ・・・・あぁ」

こうして、俺らは２－２に向かって歩き出したのだった。

1話　新学期（後書き）

短いです。で、プロローグと終わり方がすごく似てます！&ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

2話　菊来さんの性格

俺は普段と変わらない、学校の廊下を歩く。

変わっているのは・・・学年とクラスと・・・・

俺の外見・・・・・・・。そして、なぜか廊下を通る人が俺をチラチラとこちらを見るので恐い。俺、変な事したか？

俺と菊来さんは見慣れた廊下をとぼとぼ歩き、２－２へと向かった。

ここで俺の気づいた事は・・・

菊来さんはとても明るい事だ。

俺が喋る暇も無い位ベラベラと喋っていた。俺はこれからをどうするか・・・とかいろいろ考えていたので俺は話をなんとく受け流す。なぜかというとまたさっきの様に変にドキドキしない為だ。俺は男の中で育ってきたから女の笑顔はどうも心臓に悪い。

話をなんとく受け流す歩く俺にも構わず喋り続けている菊来さんは、にこにこと笑いながら俺の隣を歩く。ホントに凄い人だ。

「あ、御免！ベラベラ喋っちゃって・・・。水野さん・・・本当に御免っ」菊来さんはうつむき、今まで明るく喋って嘘のような暗い

口調になった。

「えっ！そんな事ないし！全然ＯＫ！楽しいよ菊来さんはっ」俺は菊来さんの急激な態度の変化に驚きつつ、答える。その言葉を聞いて、菊来さんの顔がパッと明るくなった。で、またお喋りタイム・・・とりあえず、機嫌が直って良かった良かったー・・・

俺はふぅ、と菊来さんに見えないようにため息をついた。

それにしても、

女の考えてる事はよくわかんねーなぁ・・・

急に落ち込んだり笑ったり、それにしてもなぜに急に落ち込む？俺・・・やっぱ変な事したかなー？（しかも廊下を通る人が俺をチラチラとこちらを見る人数が増えてるし）と、思ってると菊来さんが以外な言葉を言った。

「李玖ちゃんって美人だよね」

「は？」

「だ・か・ら～っ李玖ちゃんてすごく美人だよねって事！いっとくけどお世辞じゃないよっ！その証拠に廊下を通る人が水野さんを見てくるじゃんっ！」だ・か・ら～の所をなぜか跳ねるように言う菊来さん。

「え・・・そうだったのか？」

「あははっすごく鈍感すぎない～？面白いねー李玖ちゃん！普通気

づくよ～。なんだと思ってたの？あ、もしかして変な事したかなとか思ってたでしょっ」

「・・・・う」

図星です。マジで。

「李玖ちゃんって鈍感で自分の事自覚無し？ちょっとすごくない？っていうかー綺麗なのに気取ってない所が良い所なのかなー。あーもうすぐだねー２－２っ！席近いといいねぇ～。あ・席もしも遠かったら変えてもらおうか？隣とか。でも李玖ちゃんの隣、人気高そうだしなー・・・近いといいね～できれば隣にっ。ねーねー李玖ちゃんはどー思う？」

「・・・・そうだね・・・」菊来さん、喋りすぎで俺喋れねー・・・反対感心してしまう・・・こんなに喋れる人って・・・・

その返事を聞いて菊来さんはガクッとうなだれた。「御免・・・・私喋りすぎたかも・・・迷惑だよね・・・あたし・・・・・」そして菊来さんの頬につー・・・・、と涙が落ちる。

「えっそんな事ないないっ！楽しいし！ホラっ元気だしてっ」俺は慌ててなぐさめる。菊来さん・・・テンション変わりすぎ！！・・・と心の中で強く思うがあえて口は出さない。菊来さんはその言葉を聞いてまたもや顔がパッ、と明るくなる。（本日二回目）

「あ・・・ありがとっーーーー！」菊来さんは瞳いっぱいにたまった涙を手でぬぐった。そして俺を抱きしめる。

ぎゅっ！

えっ・・・・・・・・・・ええぇぇーーーーーーーーーーー！／／／／／

俺より小柄な女の子が俺を抱きしめ・・・・いや、俺は女だ！これは一種のあいさつだ！だからドキドキするな！俺！（混乱）しかも俺の周りの奴ら見んでくれーーーー！

ドキドキ・・・・！

菊来さんはそんなのお構い無しに俺を抱きしめた。菊来さんは「ありがとー嬉しい！」とまだ言い続けていた。そんなのどーでもいいから手ェ離してくれ！／／／／

そーしないと俺、ドキドキしすぎて死ぬ！／／／

俺はやっとの事で口を開く。

「菊来さん・・・・・あの・・・・・・・手・・・・・・」

「あ！御免！嬉しくってつい！」菊来さんはパッと俺に絡み付いていた手を解(ほど)く。

「じゃ・行こうか！李玖ちゃんっ！ちょうど着いたし・・・ね？」菊来さんはなにごとも無いように２－２の教室を見た。俺はその様子を見てさっきまで顔が赤くなっていた事を恥ずかしく思った。（今でも赤いけど）

「あ・・・・あぁ」

これから大変な日々が続きそうだ。

俺はそう思いながらも重い足を運ばせた。

2話　菊来さんの性格（後書き）

感想・ご意見くれると嬉しいです！今回も短め。＆ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

3話　龍之介先生は超ＫＹ！

俺と菊来(きくら)さんは２－２へと着いた。

なんとなく・・・・だがここまでの道のりが長かったような気がするのは気のせいだろうか・・・・。

俺達は緑色の黒板に貼ってある席順の真っ白い紙を見た。紙に教室の簡単な図が書かれていた。のんびりと自分の席を見つけようとしたその瞬間(とき)。

「きゃぁーーーーーーーーーっ！」

この声は・・・

「菊来さん？」俺は隣で飛び跳ねながら「やったー」と言っている菊来さんを見た。

「良かったーっ。李玖ちゃんと隣～～！」

・・・・・・・・・・・・そゆこと。

「ねー李玖ちゃんっ運命的だよねぇー」菊来さんは感動しているのかピョコピョコ跳ねていた。（なぜ跳ねるのかは知らねーけど・・・・）

菊来さんと俺は隣同士だった。（この事に感動して叫んだらしい）ちなみに俺から見て菊来さんは廊下側の右側の席。

「ねー！そう思わない？」

「あ・・・・ああ」

「ごっ・・・・御免・・・・・。迷惑だった？」

うるっと菊来さんの瞳がにじむ。俺はあわてて訂正。「違う違う！迷惑じゃないって！」

「有り難う！」と、ニコリと笑った。菊来さんは笑うと可愛い、と思う。

そういえば今度は抱きついてこなかった・・・・・って何ガッカリしてんだ俺／／／

俺は深呼吸で心を落ち着かせた。・・・・よし！

「じゃ、席に着こうか」

「いいよ～」

そして、俺らは席に着いた。ガタリと音をたてて席に座る。前から3番目・・・なかなかいい席かな。・・・とかなんとか思う。

そいえば。

男の頃の友達は俺の事・・・覚えてるだろうか？

いや！覚えてるよな！きっと！友達だしっ！

俺は淡い期待をこめ、男だった時の友達に会いに行く事にした。そして立ち上がる。

「あのー・・・李玖ちゃん？先生くるよ・・・？どこ行くの？」

「あ・すぐ終わる終わる！」テキトーに返事。俺は男の頃の友達に軽い足取りで会いに行った。

＊

２－５にて。俺は２－５にいる男だった時の友達で一番仲の良かった宮本健司（みやもとけんじ）に会いに行った。で、２－５の傍らに居た男に宮本を呼んでほしいと頼んだのだが・・・・。

「なっ！コイツ誰なんだよっ！新学期だってのにいきなり呼び出されて！」呼んでと頼まれた男が宮本にせきたてる。コイツに呼んでと頼んだのは地雷だったようだ。

男に「なんでもねーよ」と言い追い払うと、宮本はだるそうな顔で俺を見つめた。「で、俺に何のよう？ってか誰？」

「は？お前・・・俺の事覚えてねーのか？」

「・・・・・全くもって知らないんだが・・・しかも女の子は自分で俺とか言わないほうがいいぞ」

俺は宮本の注意など耳に入らなかった。くるりと方向を変えて、宮本に一言。「・・・・・・わざわざ呼び出して御免。じゃ」

「え？あぁ」

俺は宮本に背を向けて２－２へと走った。２－５からはさっきの呼び出してと頼んだ男の声。「なんかあったのか～？」と聞こえた。それに答える宮本の声。「なんにもないよ、多分」

・・・・・なんにもあるしっ！

結果・・・誰も覚えてないみたいだ・・・・・。最悪、宮本のアホ！忘れ魔！（↑ヒドイ；）

＊

教室に帰ると菊来が俺の机の隣で待っていた。

「早いじゃん・・・ってゆうか何かあったの？」

「・・・・ないよ（本当はある）」

「・・・・ごっ御免！あたしったら本当に迷惑な事言ったよね・・・・・うっ」瞳に涙がたまる。ヤバイ！！

「無いって！菊来さんっ！」

「本当・・・・・・？」

「うんうん！」

「ありがとっ！」菊来さんの明るい笑顔。良かった・・・。

ガラガラ・・・・・

するとタイミング良く先生が扉をガラガラと開け入ってきた。

「おーい皆さっさと席につけぇー、始業式の前に話をするぞぉー」

先生はオッサン・・・って感じ。皆にオッサンの絵描いてといわれたらこの先生の様な人をだいたいは描くだろう・・・それほどオッサンのイメージがぴったりの中年オッサン（？）だ。

「えー・・・コホン、私(わたくし)の名前はーー前川龍之介(まえかりゅうのすけ)というのであーるぅ。宜しくなのだぁ」

「あはは・・・ぅ」俺は笑い出しそうなのを必死に止めた。だってこの喋り方・・・・。「あーる」とか「なのだ」なんて今ドキ使うやついるかよ！しかも語尾に小さく「ぅ」とか「ぁ」とか言ってる・・・・。しかも名前が見た目とウラハラに渋い！

こんな先生いるかよ！つか、こうゆう奴自体いんのかよ！

つっこみたくなる口を必死におさえた。駄目だ・・・先生(コイツ)の姿を見るだけで・・・

周りの皆を見ると、皆も龍之介先生に目を合わさないようにしながら笑いを必死でこたえていた。

皆が必死だというのに、龍之介先生は喋り続けた。

「ではぁ～皆さん。私が軽くじこっ・・・自己紹介をぉっ」

・・・・・・・・・・・・・噛んだ。

しかも思いっきり。

しかも2回！！

俺達は耐え切れなくなってイッキにドッとふきだした。中には涙まで出る人も。

「先生ぇー！可笑しすぎー！」

「そうそう！あはは・・・」

「だってさーこのギャップで名前が龍之介？おかしくねぇー！」

「しかも巻き舌だし！つーか何時代の人？初めてみたっ！こういう奴っ」

「俺も俺もー！」

「先生マジＫＹじゃねえー？」

皆は口々に言い合い、大笑いした。龍之介先生を除いては・・・。

「なぁ、ＫＹってなんなのだぁ？」

龍之介先生は、のんび～りとした口調で訪ねる。皆はその言葉も

可笑しくて大笑いしたのだった。

3話　龍之介先生は超ＫＹ！（後書き）

ＫＹとは空気読めない，，，という意味ですｗ龍之介先生は超ＫＹですが・・・（笑ｗ（＾＾＊　次回からは多分のんびり更新になると思います。そしてコメくださった和藤渚さん有り難うございました！

4話　今、なんていった？自分・・・

俺らが龍之介先生の超ＫＹな人で大笑いしていた。

俺ももちろん笑っていた。

見つめられている事も気づかずに・・・――――――

「えっとぉ、ワシの好きな食べ物はー・・・」

龍之介先生の話を笑いをこらえながらも、俺・水野李玖は結構真剣に聞いていた。すると肩を軽く叩かれる。

「水野さん？」

「ふぇ？」俺は声が聞こえる方に振り向いた。

・・・・・・・・・――――――――――――げ。

コイツが誰だが認識したとき、俺は一瞬ピキッと固まった。

一ノ宮和(いちのみやかず)だ。

一ノ宮(コイツ)はわが校でも結構有名な奴で１０人中８人くらいは知ってると思う。

一ノ宮グループ（最近有名になってきた会社）の一人息子。「欲しいモノは何としてでも手に入れる」がモットー。特注だかなんだか知らねーが、白い学ラン。で、もって成績優秀。超美形(イケメン)。こういう奴がなぜこの学校にいるのが不思議だ。

ちなみになんでもできる一ノ宮を俺はあまり好きではない。女子はキャーキャー言ってるけど・・・。

一ノ宮は前を向いたまま、よく通る声で小さく呟く。

「ね・水野さんって綺麗だよね」

ネ・ミズノサンッテキレイダヨネ・・・

俺は一ノ宮(コイツ)の口からこぼれた言葉を聞きピキッと固まった。今日、何回聞いただろう・・・。というかコイツからは聞きたくない言葉だ。

「そ、そんな事・・・」

「謙遜はいいって。それよりさー・・・」一ノ宮は俺の方をぐるりと向く。すると一ノ宮のさらさらの髪が揺れた。

「俺と付き合わない？水野」

＊

菊来紅葉は二人の様子を見て必死に考えていた。

・・・・・・・ヤバイ。

李玖ちゃんがナンパされてるわ・・・・・

あの、一ノ宮グループの一人息子・一ノ宮和に・・・・

これはナンパ・・・なのかな？でもー・・・・ナンパっぽい・・・・

一ノ宮和はナンパとかする人じゃないのにな・・・ってゆうか女ったらしでもないと思うし。

う・・・・

あたしは少し戸惑いながらも二人の様子を見ることにした。

「却下」

・・・・・・・・。

以外とスッパリ断る方なんだ・・・・。（それにしても今のは早すぎる・・・）

「もうちょっと考えなよ～。ね？」

「却下！」

「あの水野さ・・・」

「却下ったら却下！」

・・・・・・・・・・凄いな・・・・・・・あんなにキッパリ断っていいのか・・・・一応一ノ宮グループの一人息子・一ノ宮和に・・・

ま・そこが良いトコなのよね！これじゃあ悪い虫も付かないし！お父さんも安心するわ！私も安心・・・・え？

・・・・・・・・・今・・・・・何(なん)ていった？自分・・・・・。

4話　今、なんていった？自分・・・（後書き）

なんか変なトコで終わりました・・・。（＾＾；&ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

5話　大変な1日

・・・・・・・・・・今・・・・・・何(なん)ていった？自分・・・・・・？

あたし・・・菊来紅葉(きくらもみじ)。今日の学校での出来事をふと思い出す。私はその時赤くなって何(なん)にも考えられなくなって・・・。

午前だけ授業だったので私の3年生になって始めての学校生活の1日が終わった・・・。

そして今・・・ベットで横になっている。夜でもないのに。

帰ってきてベットにダイブした。もやもやした気持ちを抑えたくて。

顔が・・・・熱い。

はっきり言ってあたしは大げさだと思う。

心の片隅でちょっと思った事を今、こんなに動揺してるなんて・・・

李玖ちゃん、今日のあたしの事変に思ったよね・・・？

菊来はがばっとベットから起き上がると自分の頬を強く叩いた。

「うん・・・・スッキリした！大丈夫！」菊来は無理にそう自分を励ました。頬がじりじりと赤くなっていた。そして立ち上がる。

「李玖ちゃんに会いに行こう！」

＊

水野李玖は学校の帰り道をとぼとぼ歩く。もうすぐ家だ。

・・・・・それにしても・・・・大変な一日だった・・・・。

一ノ宮に告白されるわ、菊来さんが俺に抱きついててくるやら・・・・疲れた。

家に着いた。後はこの扉を開けて入るだけ・・・・。

李玖は玄関のドアノブをゆっくりとした動作で持った。するとその瞬間（とき）、ドアが勝手に勢いよく開いた。李玖は思っても見なかった事に一瞬驚いたが、すぐにドアが自分の顔にぶつかり尻餅をついてこけた。おでこが痛い。

「・・・・・・・・なんだ？」

俺はおでこをさすりながらドアを見上げた。

・・・・・・・・・・ぅわ。

ドアの向こうには一ノ宮和が立っていたのだった。

「大丈夫？」と、言い俺に手を差し伸べてくる。俺はその手を振り払い、「お前！なんでいるんだここに！ここは俺（ヒト）んちだぞ！」と指指す。

「あー女の子は俺って言っちゃ駄目だよ・・・せっかくの美貌が台無しさ」一ノ宮はギザったらしく、前髪をうっとおしそうにかきあげる。

「スルーすんなよっ！つーかなんでココにいる！」

俺が軽くヒステリーをおこしていると（全部コイツのせい）、母さんが一ノ宮の後ろからひょこっと出てきた。

「あら？知り合いだって言ってから・・・入れたんだけど・・・・」

「知り合いじゃない！全然知らねえ！こんな人！」俺は頭をブンブン横に振り、激しく否定した。

「知り合いじゃないかー。あんなこと、こんなことした仲なのにさ」

「あら・・・・そうゆう関係だったのね・・・・李玖ったらこんなカッコイイ彼氏つくって・・・お母さん嬉しいわ」右手を頬に当てて感動する母さん。

「違うっ！あんなこと、こんなことってなんだ！知ら・・・・・」

「さ・部屋に行こうか。り・く」語尾にハートマークがつくようなとろんとした甘い声。こんだけ美形がいうときまる・・・・じゃなくて！

「勝手に呼び捨てすんなー！ってか離せこの手！」俺の腕をつかまれた一ノ宮の手を振り払おうとした。

だが、

強くて振り払えない。男の力って強い。前まで男だったくせに自分の力がいまいましほど弱い。

「さー後ま任せてお母様。李玖は照れてるだけですから」

「分かったわ！後は任せるわね一ノ宮クン！」

「はい！」と、手を取り合う。

「何気に仲良くなってるんじゃねえー！それより離せ一ノ宮っ！」

俺の抵抗はむなしく、ずるずると部屋まで引っ張られていった。

俺の部屋のドアノブに手をかけ、開ける。そして俺を強引に部屋に入れる。

「おいっ！何考えてるんだ！」

「ふふふ・・・やっと二人っきりになれたね・・・」

目を細めて笑う一ノ宮。男のくせにまつ毛が長い。しかも髪はなんかしてるのかサラサラ。・・・・・じゃなくてっ！

逃げなければっ！

俺は床を匍匐(ほふく)前進し、ドアを目指した。

ズリズリと床を這う。そして目の前のドアノブに手をかけようと

したその瞬間（とき）・・・・

一ノ宮の2本足が目の前に現れる。

「どこへ行く気だい？李玖？・・・逃がさないよ」にこりと笑う一ノ宮。その笑顔は恐ろしくねえるのは俺だけだろうか・・・・？

「さーさっ！てっとりばやくやっちゃいましょっ！」

「何をっ！」

「秘密」それだけ呟くと床に伏せていた俺にのしかかる。

「なっ・・・」

「可愛い」一ノ宮は、そのまま顔を近くに持っていく。近い。

「止めろー！離せー！何する気だオイ！」

「んーとねー。キス？」

「うげ！止めろそれだけは絶対に！」

「じゃ・付き合ってよ」

「ふざけるな！」

「ふざけてない」どことなく真剣な一ノ宮。俺は必死で抵抗。でも逃げられない。

その時。

ガチャリ・・・・部屋のドアが開いた。

そして誰?と、思ってドアを見ると・・・・・・・・

「・・・・・・り・・・・くちゃん?」菊来さんだ。目を見開いて驚いている。その声にいつもの明るい声ではなくおどおどとした口調だった。

5話　大変な1日（後書き）

一話と3話を超修正しました。気になる方は申し訳ありませんが、もう一度読んで下さいwにこさん＞アドバイス有り難うございましたw&ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

6話　一ノ宮和は俺の元凶。

「・・・・・・り・・・・くちゃん？」

思わず声がでてしまった。

あたし・・・――――菊来紅葉（きくらもみじ）は李玖ちゃんの家に遊びに来た。このもやもやは何（なん）なのかを確認するために。

それなのに。どうしてこんな事してるんだろう・・・。

床で仰向けの状態の李玖ちゃん。それを押し倒す様にのしかかってる一ノ宮さん・・・。

・・・・・・二人は恋人なのかな・・・・？

菊来の心がズキリと痛んだ。

「二人は・・・・どういう関係なの？」おそるおそる聞いてみる。分かってるくせに、紅葉。

すると李玖ちゃんは一ノ宮さんを蹴っ飛ばし、立ち上った。「一ノ宮がただのしかかってきただけだ！気にするな！菊来さん！」

「・・・・・そうなの？本当に？」

「そう！」

「そうなんだ・・・」

李玖ちゃんの「そう！」というはっきりした言葉でなんだか心が楽になった。一ノ宮さんは不機嫌な顔してたけど・・・。

「菊来さんが来た事だし、帰れ一ノ宮！」と、一ノ宮さんに怒鳴りつけた。

「はいはい。あーあもう少しだったのになー。じゃね、李玖、菊来さん。また明日！」と、投げキス。李玖ちゃんはその投げキスを手で振り払うような動作をした。そして一ノ宮さんは名鳥惜しそうに部屋から出て行った。

＊

パタン・・・

やっと出て行ってくれた・・・・！

水野李玖・・・俺は心から菊来に感謝した。菊来さんもどことなく嬉しそうだ。

「ありがとな！菊来さんっ」

「こちらこそ！・・・・あははっ」と言い、口に手をあてて笑う。

「どしたの？菊来さん」

「だって一ノ宮さんが出て行った時、すごく嬉しそうだたから・・・」

「あー・・・一ノ宮はね、俺の不幸の元にもなる存在だから。嬉しくて」

「そうなんだ〜」ホッとしたような菊来さんの声。

「あ・そういえば何か用あったの？」

「え・・・えーっとねえ・・・・」

「無いんだ」

「え・・・はい」

そして俺がふきだすと菊来さんもふきだした。

それも可笑しくて、二人で笑った。

＊

「りっく〜♪」

「李玖〜この問題の意味分かる？教えてあげるよ」

「李玖、昨日は残念だったね。あと少しだったのに」

「今からでもいからさ、俺と付き合わない？」

「うっるっせっぇ～～～～～！」俺・・・水野李玖は屋上で叫ぶ。ここは屋上なのでいくら叫んでも大丈夫！

そんな様子を菊来さんは笑いながら見ていた。

「李玖ちゃんさー、今日逃げまくってたよね。顔が面白かった」

「え・・・少しは心配してくれよ・・・」

「あはは」

「オイっ！」

こんな感じで、一ノ宮のアタックに疲れた俺はなんとか逃げ切り屋上で昼食を取っているという訳だ。

それにしても、、、

「疲れた・・・」

「頑張ったよ李玖ちゃん」と、ふきだす。

「なっ！そこで笑うか！」

「・・・御免・・・・迷惑だよね・・・・・・・」菊来さんの瞳に涙がたまる。

「そんな事ナイナイ！大丈夫！」

「それにしてもさ・・・・」さっきまでのおどおどしさは無く、い

つもの菊来さんに急に戻った。もしかして今のは猫かぶりだったのでは・・・・・？そして、急に機嫌が悪くなる。

「ん？」

「一ノ宮さんってさ・・・李玖ちゃんの事呼び捨てで呼んでるんだね・・・」

「アレは勝手に呼んでるだけで・・・」

「・・・・そうなの？」瞳がうるうるとしてきた。菊来さんは泣き上戸だな、と毎回思う。

「そう！気にすんな菊来さん！」

「・・・・・あたしにはさん付けなんだ。一ノ宮さんは呼び捨てなのに・・・・」うるうる度が増す。

「え？」

「呼び捨てで呼んで」

「・・・ん？あぁ」

「こっちも呼び捨てでいい？」

「いいよ・・・？」

なんか今日の菊来は変だ。急に不機嫌になって・・・。俺は弁当のウインナーを箸でつまむ。

「どしたの？今日なんか変だよ菊来」

「違ぅっ！」怒りくるう菊来。

「ほぇ！？」

「その呼び捨てじゃないっ！」

「え？どの呼び捨て？」

「だっかっら～！下の名前で！」

「あぁ！なるほど！」俺は納得して口にウインナーをいれようとした。

だが、、、、

ガチャっ

「ここに居たの？李玖～♪」ドアから飛び出すように出てきたのは一ノ宮和だった。

「ぅわっ！くるな一ノ宮！」

いきなりの展開にびびりながらも俺はそういい、手でシッシッという仕草をする。一ノ宮はそんな俺にも構わず、じりじりと近づいてくる。

「ふー・・・探したんだからな～。」にっこりと笑う一ノ宮。駄目

だ・・・・！この笑顔に騙されてはいけないぞ俺！

「探さんでいい！」必死で抵抗する俺。一ノ宮との距離・４メートル。

「またまたぁ～照れちゃって～。いいかげん俺と付き合いなよ～」じりじりと近づいてくる・・・・。一ノ宮との距離・３メートル。

「照れてねぇ！付き合いたくねぇ！」一ノ宮との距離・２メートル・・・ぅわ・・・・もう駄目だ・・・誰か・・・！

そんな俺に近づこうとする一ノ宮の前に紅葉（もみじ）（呼び捨てでいいといわれたの呼び捨て）が立った。

「李玖が嫌がってるのよっ。いいかげん止めなさい！」

おぉ・・・・！

俺は紅葉が輝いてみえる・・・・！俺は思わず感動して涙が出そうになった。

紅葉はそのまま一ノ宮と睨みあった。

ほんと数秒だったけど、長い時間が経ったように思えた。

先に切れたのは一ノ宮のほうだった。

「ふぅん」と頷き笑うと、「今日はここらへんにしといてあげるよ」と言ってこの場を去った。

パタン・・・

「ありがとな紅葉！2度も助けてもらって・・・」

「いいよいいよ。李玖の為だし！」そういって紅葉はにこりと笑った。

＊

一ノ宮和は屋上の階段を下りていた。

なるほど・・・・そういう事・・・・・。

そして、自分を睨んでいた菊来の顔を思い出す。

「ライバル出現・・・・だねぇ」

一ノ宮は楽しそうに独り言を呟くと階段をゆっくりと下りた。

6話　一ノ宮和は俺の元凶。（後書き）

ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

7話　心臓の鼓動

菊来紅葉は少々ホッとしていた。

李玖の力になれて良かったー・・・、と。

あたしは少々怯んでいたが、無事に力になれたので嬉しい。

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴った。これは昼休みの終わりのチャイムだ。

「あぁー・・・昼休み終わったなーっ」つまらなさそうに軽く李玖は伸びた。

「そうだねぇー。教室、帰ろ～」

「あ・少ししたら行く」

「うん・・・？いいよ。じゃ・先いってるね」

あたしは屋上の扉を開け、教室へと向かった。

たったった・・・・

軽い足音が響く。

階段を降り、廊下を歩いている時だった。急に肩を叩かれる。

「菊来さん？ちょっといい？」３人の先輩達。右から淵無しメガネを掛けた先輩。真ん中は茶髪でほっそりとした先輩。左にはぽっちゃりとした少し太っている先輩。

「はい・・・？いいですけど・・・」

先輩達は、返事を聞くと「こっちに来て」と言って９０度回転し、歩きだした。なんだろう・・・・？

あたしは先輩達にいわれるまま、着いて行った。

「あのー・・・ここ校舎裏ですよね？」

「そうよ」

「何するつもりですか？」その言葉に反応し、メガネの先輩が眼つきを変えた。

「あんたさー・・・、李玖様の傍に居すぎじゃない？」と、メガネを付けた先輩は言った。

「へ？」いきなりの言葉に驚くあたし。何だソレ。

「だからぁー李玖様の傍に居すぎぃー。必要最低限にぃー」こちらはぽっちゃりとした女の先輩。

「いい加減離れなよねー。可愛こぶりやがって」と、茶パツのほっそりとした先輩。

「あの・・・あなた達は・・・・」

「「「李玖様ファンクラブよ！」」」3人でハモル。

あぁ・・・そうっスか・・・

「ちょっとあなたぁー。今軽く呆れたでしょー？」

「いえいえそんなことはないですよ（本当は思った）」

「生意気すぎ！」と、茶パツの女が手を挙げた。

な・・・殴られるッ！

その時だった。

パシン！

「痛（いた）・・・・え？痛くない・・・・・」

あたしは今の状況がよくわからなくなりながらも、目をゆっくり開いた。

「・・・・・・李玖っ！！」あたしは弾けたように叫ぶ。

李玖がなぜかあたしの代わりに殴られたのだった。あたしはなんだかよく分からなくなって頭が混乱する。

え、なんで。李玖がここに・・・。どうしてあたしの代わりに殴られたんじゃ・・・。

「大丈夫か？紅葉」

「あたしは・・・・・大丈夫・・・・だよ・・・・・」言葉が息詰まる。なんで李玖がここに・・・。

「り・・・李玖様っ！」茶パツの女は仰け反って驚いた。驚いて当然だ。だってファンにとって愛しの李玖様を殴ったんだから。

「殴りたいなら俺を殴りなよ。紅葉がどうして殴られるのかは知らないけど」

「り・・・・李玖様・・・・・」

「馬鹿ー！カッコよすぎー！王子様ーっ！」捨てゼリフを残し、茶パツの女が走りさってしまった。そして後の二人も追いかけるように行ってしまった。

それにしても、普通文句をいうんじゃないだろうか・・・・？（最初以外全部褒め言葉・・・）

じゃなくて！

「李玖のアホ！マヌケ！馬鹿！」あたしは思っていた事全部を李玖にぶつけた。李玖は一瞬変な顔をしたけどすぐに元通りになった。

「紅葉。助けてあげたのにその言いザマは何かな～？」からかう様な李玖の言葉。あたしはますます顔が熱くなる。

「アホ・・・・大馬鹿・・・・・どうして・・・・・かばったのよ・・・・！」

自分で瞳に涙が溜まるのがわかる。やだ・・・・どうして泣くのよ・・・・・！

「御免な」よしよしとあたしの頭を優しく撫でた。温かい・・・・。その温かさに甘えたくなって、あたしの涙はますます止まらなくなる。

「うー・・・・」もう泣こう。泣くだけ泣こう。だらしなくてもいいや・・・・・。

「恐かったよな。俺がいるから大丈夫だよ」

どうしてそんなに優しくするの？甘えたくなっちゃうじゃない・・・・

あたしは李玖がとてもカッコよくみえて顔が会わせられなかった。ぐしゃぐしゃのあたしを見てほしくない事もあるけど。

どき

どきどき

・・・・・・・・！？

急に心臓の鼓動が速くなった。自分でも分かる。急に鼓動が・・・・。

あたしは訳が分からなくなってぎゅっと目を閉じた。

本当・・・・意味不明だな・・・李玖は女なのにね・・・・・・。

あたしは泣くだけ泣いといた。その後ぐしゃぐしゃのあたしが李玖のケータイで写真を取られている事も知らずに・・・・。（そして一ノ宮に送った（笑））

7話　心臓の鼓動（後書き）

最近は菊来視点が多いです＾＾；　次回も菊来視点になると思います。（主人公は誰なんだ；；）他の方の作品を見ると、やっぱり自分はまだまだ未熟だな、と思います。（タイトルも変だし、文章も変です；）＆ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

8話　ライバル同士

「今日、用事あるから一人で帰るね」

私は今日寄りたい所があったので帰りは李玖とではなく、一人で帰る事にした。

寄りたい所とは本屋だ。

本屋なら李玖と寄っても良かったけど李玖の家と反対方向だがら断った。

李玖にそういったら無理して着いてくると思うから無理させたくない。

と、いう訳で一人で帰ってるあたしです。

「喋り相手がいないのは辛いな～」独り言を呟く。だが誰も反応しない。寂しいなー・・・。

本屋は学校からでて徒歩２０分。結構遠い。だがあたしは近道を知ってるからへっちゃらだわ！

近道と言うのは建物と建物の間の道だ。ココを通るとわりと早く行ける。あたしは前ここを通ったときに見つけたのである！

「よいしょっ・・・と。相変わらず狭いなー」建物と建物の間はわ

ずか５０ｃｍほど。肩幅の広い人は通れないと思う。しかも足元は空き缶などがちらばり、さらに歩きにくい。

わりとスムーズに歩けてるぞ、あたし！あともう少し・・・。

その時。

ドシンっ！

「わきゃっ！だ、誰！？」ぶつかった・・・けど、人はいない。人影も見当たらない。

「俺だよ俺」

聞き覚えのある声・・・・。

「い、一ノ宮さん！？」

「大当たり～。とりあえずココ暗いから出ようか」

「は・はい・・・」

あたしと一ノ宮さんはとりあいえず出る事にした。空き缶が足にぶつかったりもしたけどなんとか通り抜けられた。

「で・何してたのあんなトコで」

「こっちのセリフよっ」

「俺はあそこを近道にしてたんだよ。で、今は帰ってたとこにぶつ

かった」
「え・どこ行ってたの？」
「秘密」
「なっ」
「それにしても。ここで話すのもなんだし、どっか行かない？」
「え～・・・・」
「えーとはなんだ、えーとは。話たい事あるしさ。俺のおごりでもいいから」
「行く！」おごってもらえるんだったら当然行きたい！
「・・・じゃ・行こうか」一ノ宮さんは苦笑しながらも、歩き出した。あたしもそれに続いて歩き出した。

あたし達が着いたのは、「M」の黄色い文字に赤い看板のお店。
「え・マック！？」
「うん・そう。どこからどうみてもマック」
「えー。安いトコでおごりなんてずるいじゃんかー」

「安さうえに旨いんだよコレ」

「・・・そうだけど」

「ね・何食う？」

「ビックマック・ハンバーガー・ポテト・ナゲット・サラダディッシュにコーラ・ソフトクリームぐらいかな」

「え・結構食うじゃん！しかもビックマックって」

「・・・・？普通だよ？」

「普通じゃないって・・・・」

「え～普通だって！それより・一ノ宮さんは何食べるの？」

「あ・俺？ハンバーガーかな」

「えっ！少っっ」

「菊来さんが普通じゃないと思うな・・・夕食前にそんなに食う人といないと思うし」と、ニッコリと微笑む一ノ宮さん。時々李玖が『一ノ宮の微笑みは悪だ悪！不吉な事が起きる！』とか行ってるけどそんな事無いと思うな、あたし。（おごってくれたしね）

適当な席にカタリとあたし達は座った。

よし、食べるぞ！

あたしは目の前にある食べ物（ビックマック）に手を伸ばし、かぶりついた。

もくもくと食べるあたしに一ノ宮さんは苦笑。「よく食べるなー。本当に女の子なの？」

「ほーだよ〝。お〝んふぁほのごだほ」

「・・・・・。もう一回。今度は食べてから言ってよ」

「そーだよ。女の子だよ」あたしはそれだけ言うともくもくとまたビックマックにかぶりつく。これ、ビックマックとかいってるけどたいしたことないな・・・。

「菊来ってさー・・・食べ物の事になると口数少なくなるな」

「ほーだよ（そーだよ）」もぐもぐもぐ。

「ね・これ見てみな」と言い、携帯を取り出した。そしてビックマックを食べ終えた私にビッと突き出す。

そこには涙でぐしゃぐしゃになったあたしがいた。も・し・か・し・て・・・・・・・

「李玖が送ってきた。面白いでしょ、この顔」と、ニヤリと笑った。どこが面白いんだ、こんな写真！

「・・・このヤロ・・・！」私はさっき思った事を訂正しよう。コイツは悪だ！

握り拳に力を入れた。

「何度見ても笑えるよな。この顔」

あたしはその瞬間に一ノ宮和の憎たらしい微笑みを浮かべる顔に力いっぱい叩(はた)いた。

パチーンッ！

鈍い音がした。その音に皆が反応して振り向いた。

「女をからかうと、こうゆうことになるのよ！」

「はい・・・」一ノ宮さんの頬には、くっきりと手の後がついていたけど無視！

「それで・・・話って？まさかこの写真の事じゃないよね？」

「違うって・・・ちょっと聞きたい事があってね・・・・」晴れ上がった頬を痛そうにする一ノ宮さん。（けど無視！）

「・・・・君さ、李玖の事好きだよね？」

・・・キミサ、リクノコトスキダヨネ？

「・・・・・・・は？」あたしはそれを聞いて一瞬固まった（と思う）。今、何(なん)ていった？

「李玖の事好きだよね？菊来って」

「なっ・・・！違うっ！」みるみるうちに顔が赤くなるのが自分でも分かる。嫌。恥ずかしい。

「図星じゃん。そんなに赤くなっちゃって」

「女なのあたしは！赤くなったのはびっくりしてるだけ！」

「女でもいいじゃん？」

「ちょっ・・・・・もういい！帰る！」と、あたしは食べ物をバックに詰めた。席を立ち上がり行こうとすると、一ノ宮さんが笑う。

「食べ物は持って帰るんだね」

うるさーいっ！！！！、と思ったけど声には出さない。出した瞬間に泣きそうになる。

マックを出ると涼しい風が吹き寄せてきた。もう日は沈み、真っ暗になっていた。

あたしの赤くなった頬もなんとなく元に戻ってきた。

あたしはふと一ノ宮さんのニヤニヤ笑いを思い出す。・・・・今度からは李玖と一緒に血祭にあげよう！（↑ヒドイ；）

あたしはそう思いながらも、ずんずん歩いた。バックの中の食べ物が重い。

あたしの李玖の思いは雪の様に降り積もっている事も知らずに・・・。

8話　ライバル同士（後書き）

次回からは李玖視点に戻ります。時々、誰が主人公か分からなくなる時があります；（苦笑＆ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

9話　折りたたみ傘とどしゃぶり

俺はいつも折りたたみ傘を（なぜか）持ち歩いている。

そんでもって俺は折りたたみ傘の存在をいつも忘れてしまい、折りたたみ傘を使わない事が非常に多い。

なので俺はいつも家からもう1つ持ってきている。そして帰りになるとふと折りたたみ傘の事を思い出すのだ。そして俺は思う。・・・なんでこんな事を繰り返すんだろー・・・、と。

6時間目がもうすぐ終わるという時。俺は龍之介先生ののんびりした声で思い出した。

「皆さぁ～ん。雨が降ってきたので傘を使いましょうなのだぁ～。無いのなら龍之介先生が貸してあげるのだ～。1つしかないけど～」なんか言葉が成立してないぞ・・・・。龍之介先生・・・敬語の後に『なのだ』は、いらねーし・・・。しかも1つしかないのなら龍之介先生はどうするんだ・・・。

そういえば。

折りたたみ傘あるのに・・・・家からまた持ってきちゃったな・・・・・。

「どうした？李玖？俺とあいあい傘したいの？李玖ならいつでもOKだよ」といって微笑んだ。そういえば、なぜか紅葉が『一緒に一

ノ宮さんを血祭にあげよう！』とか言ってはりきってたな・・・・。ひとまずコイツの事は無視しよう！俺はもくもくとノートをとるふりをする。一ノ宮はつまらなさそうに俺の毛をなぜか一本取った。

プチッ

「いっ・・・・・・・」

「ちょっと一本くれよ」と、言いつつ俺ソックリの人形を取り出す。

「おまっ・・・何する気だよ！」

「えっとねー。髪の毛をこの人形にいれると両想いになれるっていうおまじない♪」

「やーめーろっ！キショイぞっ！俺はおと・・・」と、言いかけて喋るのを止める。今は女なんだった・・・・。

「え？俺はおと？」

答えられずに黙っていると一ノ宮が閃いたようにポン、とグーで手の甲を手を叩く仕草をする。（いいかげん古いぞお前・・・）

「分かったー。俺は乙女って言いたいんだろー♪嫌だなぁ、李玖は俺だけの乙女じゃないかぁ」

「違う！どーでもいいから人形返せ！」俺は人形に向かって手を伸ばし、取ろうとした。だがあっさりと一ノ宮はその攻撃をかわす。

「えー。最初（ハナ）っから李玖のじゃ無いじゃん」と、無邪気に笑った。

そして人形の背中のチャックを開け、髪の毛を一本入れる。俺はその隙を見逃さない。

「ほらっぐずぐず言うな！勝手に俺の何か作るのは、えっとー・・・・著作権だぞ！多分・・・」と、言いながら俺ソックリの人形を取り上げた。全く、コイツは目を離すとロクな事が無いんだから・・・。

「え・それって四六時中俺の事見てるって事だよねー」と、人形を笑顔で取り返す。

「なっ・・・何勝手に人の心読んでんだ！しかも違うし！」人形にてを伸ばすが、ひょいっ、と避けられた。

「俺は何でもできるんですよー」

「んな訳ねーだろっ！」俺は一ノ宮の勘違い＆馬鹿っぷりに否定しながら呆れながら、人形をやっと取り戻した。そんな時、一ノ宮は瞳をらんらんと光らせていた。俺の頭の脳細胞はピコーンピコーンと音をたてながら『悪い事の起きる前触れ！』と騒ぎ出す。

「じゃ・賭けしない？」と、悪魔の様に微笑む一ノ宮。だいたいはこの笑顔で騙されるが、俺は騙されないんだからな！脳細胞は悪魔のに微笑みを見てもっと騒がしくなった。やばい、逃げたい！

「何だよ。賭けって？」曖昧に聞いておく。コイツの事だろうからロクな事が無いと思うが。脳細胞は聞くな！聞くな！と言い返す。今サラ遅いぞ！

「俺が李玖の唇奪えたら俺と付き合う、ていう賭け。そんでもって

奪えなかったら李玖の事構うのやめるよ。期限は一ヶ月。これでいいねー決定～♪」脳細胞達はショックをうけ、倒れ始めた。

「ちょっ・・・何勝手に決めてる・・・」と、言いかけて口が止まる。コイツが構ってこなければ平和なんだ！多分。それだったら・・・！

「ちぇーっ駄目かー・・・」

「いえいえ！全然駄目じゃねーよ！むしろＯＫ！」俺は頭をブンブン縦に振り、肯定した。

「え・いいんだ」驚いたように目を丸くする。

「ああ！」

「ふーん・・・。じゃ、李玖。負けて当然だね」ふふん、と余裕の笑顔を見せた。

「一ノ宮！俺はこの勝負！勝つからな！」

そこまで言った時、チャイムが鳴った。そして６時間目が終わった・・・。

雨はどしゃぶりになっていた。走って帰る人も多かった。殆ど男子だったけど・・・。

そして俺は学校から出て、商店街の中を歩いていると店の屋根の舌に雨宿りしている女の人を見つけた。女の人はフワフワの髪をカールにしていて、茶色っぽい色の髪だった。髪の毛にゆるくウエーブがかかっている。後ろの方の髪だけを太い紐のようなものでちょうちょ結びに一つにまとめたヘアースタイルだった。顔はとてもこの世のものとは思えない程の美人。アーモンド型のくりくりっとした瞳も印象的だ。身長は女といのに長身。俺らの学校の制服を着ているからきっと同じ学校だろう。先輩(さんねん)だと思ったが、ピンバッチが赤色なので2年生らしい。雨のせいかフワフワの栗色の髪がしぼんでみえる。

俺は美人はあまり好きという訳でも無いが、とても困っている感じだったので自分の傘をちょうちょ結びの女の人に差し出した。

「ハイ。どーぞ」

「えっ・・・私に?」

「あぁ。使いなよ。濡れるよ」

「え、ええ。有り難う」女の人は一瞬戸惑ったが、すぐにニッコリと笑顔を見せ、傘を受け取った。

俺は折りたたみ傘があるから大丈夫だと思い、鞄の中を手であさる。

・・・・・・・・・・・・・・無い。

俺の頬に汗が一粒。つー・・・と、つたった。

・・・・・どーしよ。今サラ返せってのもヒドイし。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・もう、どうにでもなれ！

俺は女の人に「では！」とだけいうと雨の中走って帰る事にした。ばしゃばしゃとすっかり雨で水びたしになった道を走った。

後ろからさっきの女の人の声が聞こえる。「あ！本当に有り難う！君、何組？」

「2－2！」

俺はそれだけいうとどしゃぶりの雨の中を駆け抜けていった。

9話　折りたたみ傘とどしゃぶり（後書き）

学校が忙しくなってきたので更新が遅くなりますw（^^＊&ネット小説の人気投票に参加しています！投票していただけると励みになります。（月1回）

１０話　転校生と風邪。

俺はいつものよーに、家を出て学校へ行こうと玄関の扉を開く。俺のほっそりとした白い指がドアノブに触る。元は黒い健康的（？）な肌だったのだが、女になって白い肌になっている事に気がついた。それに、髪の毛もストレートのロング。すっかり俺の外見は変わってしまった。変わっていない事といえば俺自身（こころ）だけだろうか・・・？

俺はそんな事も考えながら少し水っぽいアスファルトの道を歩いた。

塀の上を歩く猫。時々ちらちら見える真っ赤な家の屋根。電信柱。それにしめっぽい朝の空気。

いつもとあんまり変わらない道を歩く俺。こういう静かな時が好きだ・・・と毎回思う。

俺はしみじみと老人のようにゆったりと道を歩いた。あぁ・・・なんて静かなんだ・・・！、と。

そんな時。

「水野さ～んっ！」

どこからともなく聞こえる声。・・・・なんだ？

俺はピタッと止まり、キョロキョロとあたりを見回した。だがどこにも見当たらない。気のせいだな、きっと。俺はそう心の中で確信すると、横に向いている首を前に振り向こうとした。

「ここよここ！目の前にいるじゃないっ！」と、俺の目の前に突然現れた女の人。アーモンド型のくりくりっとした瞳がきらきらと輝いているようにみえた・・・・ってあれ！？

「い、いつから居たんだっ！？お前っ！」

「あらヤダ～ずっとココに居たわ～」にこにこと微笑む女の人。白い着物（みたいな？感じ）を（なぜか）着て、顔はとてもこの世のものとは思えない程の美人。フワフワの髪をカールにしていて、茶色っぽい色の髪。髪の毛にゆるくウエーブがかかっていて、後ろの方の髪だけを太い紐のようなものでちょうちょ結びに一つにまとめたヘアースタイルだ・・・ってなんか前同じような事を思ったような・・・・？

とにかく。

「嘘だろ！？嘘と言ってくれ！嘘だろ・・・絶対。俺は周りをちゃんと見回したんだから。前にいたら絶対気づくはずだ。それにいつからここにいたんだ・・・ありえない！ありえなさすぎる！！」

「あいにく、嘘は付かない性格なのよ☆御免ね、水野さん」

「謝まらなくてもいい・・・ってかなんで俺の名前？」

「あー。私の事覚えてないんだ・・・残念」

「え、えと，，，誰？」

「私は天宮神社の長女の天宮光（あまみやひかる）というのよ～。よろしくね♪」と、

天宮さんは優雅にくるりとその場で一回転した。

「・・・あ、あぁ・・・宜しく」曖昧な返事をしておく。天宮さんはそれが気に入らなかったのかちょっと不機嫌な顔をして、「元気ないわよー。もしかして風邪引いた？」

「・・・・・？いえ」

「そう。なら良かったわ・・・。はい、コレ！昨日はありがとう！」ト、言いつつ折りたたみ傘を俺の方に差し出した。・・・・・・あ！

「昨日の！」俺はモヤモヤとしていたきりが晴れるようにスッキリした気持ちで思い出した。昨日の傘を貸した人だ・・・と思う。

「思い出してくれた？おかげで昨日は濡れずに済んだわ。水野さんは濡れちゃたけど・・・御免ね・・・」

「えっ！全然いいよ！ってか天宮さんが誤る事無いじゃん！」

「ふふ，，優しいのね。水野さん・・・・ますます気に入ったわ」ふふ・・・と、闇のように微笑んだ。言葉の最後らへんが小さくて聞こえない。なんていったんだろ・・・・？

「ん？」

「あ・なんでもないのよ～っ！気にしないで！」

「・・・・？」

「では、また会いましょうね～」と優雅に微笑み、俺が瞼を1回瞼（まぶた）

を閉じたときにはもう去っていた・・・・何(なん)だったんだ・・・？

＊

学校へ着くと時計の長い針は１２を回っていた。

やばい！遅刻だ！

俺は全速力で廊下を駆け抜けた。そして階段を２コ抜かしで走る。そのままの勢いで教室になだれこんだ。

「遅かったなのだ～水野さん～。これからは気をつけるのだ～」と、ゆっくりした口調で龍之介先生は俺に話しかけた。あー・・・間に合わなかったかー・・・・。

しぶい顔で「はい・・」と言っておくと、紅葉と目が合う。なぜか紅葉は顔を真っ赤にして目をそらした。一ノ宮は・・・いないな。風邪でも引いたんだろう。とにかく、平和平和♪

俺は、席に着くと龍之介先生の隣に女の人がいるのに気づいた。

真珠の様な真っ白い肌。フワフワのカールした髪・・・・って・・・

「天宮さん！」俺はガタッ、と音をたてて立ち上がる。皆の視線が

俺に・・・。はずいぞ。コレ・・・。

龍之介先生は別に怒る様子もなく、にこにこっ～と笑う。「お～、知り合いかなのだぁ～。こんな感じで仲良くしてやってくれなのだ～」

なぜか紅葉の視線が痛い。俺はそしらぬ顔をしながらふと頭によぎった事を述べた。

「え？天宮さんもしかして・・・」

それまで黙っていた天宮さんはニコリと微笑み、俺の言葉に続けた。「そう、転校生よ。昨日は学校にあいさつに行ってから制服を着てたの」と、言いつつ自分の白い着物の端をつまむ。

「えっと・・・とりあえず自己紹介をしてくれなのだぁ。それと水野さん、座ってなのだ」

「あ・・・はい・・・」俺はゆっくりと椅子に腰をかけた。その様子を見計らって天宮さんは口を開いた。

「天宮光（あまみやひかる）っていうのよ。えーっと私は天宮神社の長女で、一ノ宮のイトコなの」

俺はその言葉に驚く。・・・確かに・・・似ているような気がするけど・・・。

「じゃー、とりあえずそこに座ってくれなのだ」と、俺から斜め右の席を指差した。そこの席に天宮さんは座った。そして俺の方を向くと、「よろしくね」と軽く一言。俺も「こちらこそ」と返事をし

た。

＊

「うーんと・・・誰か一ノ宮さんにプリントを届けてくれる人いないかなのだぁ？」

放課後。

俺と龍之介先生しかいない教室。皆はさっさと帰って行ってしまったし、紅葉は「さ、先かえるね！」と行ってしまったし、天宮さんは授業の間にいきなし窓から飛び降りて帰っちゃたし（猫か天宮さんは；；）・・・。

・・・・・・・・・どうみても俺に頼むしかないだろ！！！龍之介先生！！

俺はアホらしくなって教室を出ようとした。だが・・・・龍之介先生の縋るような瞳に負け、結局俺が届ける事に。

家は知らないので地図を貰い、学校を出た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・嫌～な予感がするのは気のせいだろうか？

俺はそう思いながらも、とぼとぼとアスファルトの道を歩いた。

１０話　転校生と風邪。（後書き）

最近更新が遅くなっています；&ネット小説の人気投票に参加しています～。投票していただけると励みになります。＾＾＊（月１回）

11話　二人の一ノ宮

俺は長い道のりを歩く。

俺・水野李玖（みずのりく）は、一ノ宮の家へ向かってます。（なぜなに敬語・・・）

一ノ宮ん家（ち）はかなり学校から遠い。

長い長い道のりを歩く。

アスファルトの匂い。

しめった雲・・・それに空気。

雲がかぶさった空。

なにもかも新鮮な感じがする。今日は。

俺はゆっくりと道を歩いていた。

だた、ゆっくりと。

＊

・・・・・・・・・・でかい。

ここが一ノ宮の家か・・・・でかいな。それに綺麗だし。鉄格子の柵・・・どこまでもスゲェ。

ピンポーン

俺はゆっくりとした手つきでチャイムを押す。

すると、チャイムから声が聞こえた。

『失礼しますが、水野李玖様でしょうか？』

「あ・はい。そーですけど・・・何か？」

俺が言い終わらないうちにギィィィイーと、鉄格子の柵の扉が開く。そして高価そうな玄関の扉がバターッンと開き、中から黒いサングラスと黒いスーツを身にまとったガッチリとした体格の男達がでてきた。（マトリックスかよ！お前ら！）

その勢いにびびって後ざすりしたが、すぐに男達に取り押さえられた。

「はなせーっ！何だお前らは！」

「私達（わたくし）は一ノ宮家の者です。安心してください」数人の男のうちの一人が落ち着きをはらって言う。

「違う！！家に入らなくてもいいんだよっっ！プリントを届けに来

ただけ！」必死で抵抗するが、大勢の男達にしっかりと手足が掴まれているので、ふりほどこうにもふりほどけない。

「いえ・・・。そういう訳にもいきませんし。春人(はるひと)様にいいつけられたもので」

「え？春人・・・？」一瞬思考が停止(フリーズ)する。誰だっけ・・・・？

「いえいえ、何でもございませんよ」男はそれだけいうと、俺を持ったまま、ほいほいと階段を駆け上がった。そのまま部屋の扉がギイー、と開いてそのまま放り出される。

「痛(いて)っ！」そのままドスンと尻餅をついた俺は、伏せていた目をそっと上げる。

大きく、綺麗な窓。そして白くて薄く、透明に近い色のカーテン。風が吹き、さぁっと揺れる。その下の方には大きく、でかいベット。そのベットで人が寝ていたのだが、なぜかゆっくりと腰を浮かした。逆光で顔がよく見えない・・・。

誰だ？

眩しいのを我慢し、目をこらす。

色素が薄い、サラサラの髪。やわらかな日差しを受け、髪はさらに色が薄くなっていた。綺麗な整った顔だちに浮かべる微笑みにうっすらと違和感を覚える。・・・・・・・もしかして。

「一ノ宮・・・？」

男はにこりと微笑えみ、「そうだよ」と、ベットの上でカーテンを閉めた。明かりがついていない部屋のゆういつの明かりがふっと途切れた。

俺はまたもやにうっすらと違和感。なんだか今日の一ノ宮はなんだか違う。いつものなにか裏がありそうで、意地悪そうに微笑む感じじゃなくてー・・・えーと。

今日の一ノ宮は、純粋っぽい笑顔。裏が無いって感じだな・・・多分。

「ふーん・・・君があの・・・」と、一ノ宮が独り言のように呟く。俺はその言葉に首を傾げた。

・・・・・・・・・・・・？・・・・・・・君ってなんだ君って？別に呼び捨てとかで呼んでもらいたい訳じゃないけど、ちょっと違和感が感じる。まただ。この感じ。

一ノ宮はにこにこと笑いながら、ベットから降りて俺の方へと近寄る。俺は何だと思い後座すりしたがすぐに腕をつかまれた。

「・・・・離せよ！」俺は顔を真っ赤にして抵抗。一ノ宮は俺の事も聞かずに、ぐいと引っ張る。バランスを崩し、倒れそうになったところを一ノ宮が受け止めた。俺はボッと火がついたように赤くなるのが自分でもわかる。一ノ宮はそんな様子を見て、納得したような声を出す。

「なるほどね。面白い。これだったらカズも惚れる訳だねー」意味

不明な発言。

「・・・・・・・・・・・・・は？」

「あ・俺の事なんだって思ってた？もしかしてカズ・・・」にっこり微笑み、一ノ宮が言いかけたその時。部屋の扉が勢いよく開く。

そして、出てきたのは・・・・・・・・・・・・。

「い、一ノ宮！？」

俺は二人目の一ノ宮の登場にあたふたと驚くだけだった。

１１話　二人の一ノ宮（後書き）

コメント頂けると嬉しいですｗ&ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。＾＾＊（月１回）

１２話　俺とハルと春人と。（前書き）

注・なんとなくＢＬっぽいかもしれません（涙；

12話　俺とハルと春人と。

一ノ宮和・・・つまり俺の事だ。

李玖は驚いた顔で俺を見ていた。

・・・無理も無いだろう。だって春人がここにいるのだから。

「春人・・・　李玖に何をした？」

「ん？何にもしてないけど？」

春人のケロッとした態度にふつふつと怒りがわいてくる。何もしてないという事はありえないだろう。それにしてもどうして李玖がこの部屋に・・・・。

俺は耐え切れなくなって李玖の手首を掴んだ。

後(うしろ)から李玖の抗議の声が聞こえてきたが、無視。

ただ一つ思うのは・・・。

・・・・・・春人に・・・会わせたくなかった・・・。

俺は無言のまま歩き続けた。気づいた時には公園の目の前まで来ていて、そこで我に返る。

「お前・・・・どうした？」

李玖の心配そうな声が聞こえる。

「別に・・・なんでも・・・」

俺はなんとなく嫌になってその場を立ち去ろうとしたが、李玖の細い手に俺の手首を掴まれる。細くて弱そうな容姿なのに力が割りと強い。そう考えている俺に対して李玖はとても心配している表情が見える。

「待てよ。お前さ、今日変じゃないか？」

「・・・・・・」悪いが同情されるのは嫌なんだ・・・、と言い訳して立ち去る事もできるのになかなかできない。

「一ノ宮。ここに座れ！」と、指差す場所はブランコ。水色のペンキと赤色のペンキの色が塗ってあるなんだか不釣合いのブランコ。ペンキを塗った部分が所々（ところどころ）ハゲていてなんとなく痛々しい。

なんとなくこの歳にもなってブランコというのは恥ずかしいが、幸い誰も居なかったので座った。座った途端に李玖が真面目な顔で怒鳴るように喋る。

「お前、思ってる事全部吐け！」

「・・・・・・・・は！？」

「だから！思ってる事全部吐けよ！」怒っているような李玖の口調。でも顔を見るとあきらかに心配そうだ。

「・・・・・・・何で」

「いいから」

強引な態度にムッときたが、素直に喋る事にした。

「一ノ宮和（いちのみやかず）・・・・・・・・――――俺は、一ノ宮グループの一人息子・・・と、されているんだ」

「は！？」驚くのも無理は無い。だって俺は一人息子だと思われているのだから。

「俺は跡継ぎをするために生まれた。それ以外の人間はいらない」李玖の言葉に構わず、喋り続ける。なんとなく俺の言葉に怒りの様なモノが混じる。

「そして双子の弟・・・春人（はるひと）は俺と同じように育てられたが、親の愛情は俺にそそぐばかりだった」

「そして春人は身体がもともと弱かったので学校にも行かず、正式には春人の存在は世には知れわたってはいない。両親も、跡継ぎ以外は必要無いと思っていたらしく、春人の事はあまり人には話されなかった」

「そしてますます、春人の存在は世に知れわたらなくなり、いつの間にか俺は、一ノ宮グループの一人息子という事になっていた・・・」淡々と俺は喋り続けた。李玖に言っているじゃなくて俺自身に言っている様な気がするのは気のせいだろうか？

「一ノ宮・・・俺にそんな事話していいのか！？ってかお前ら双子！？そんなサラリと言うなよ！？」

「なっ・・・お前が全部吐けっつたんじゃん」李玖とは決(け)して目を合わさない。合わしたら何もかもぶちまけてしまいそうな気がして。

「そうだった・・・。なんか御免な」

誤りたいのは俺の方だよ。李玖・・・。

本当は全部話していないんだ。

本当は・・・・――――――。

こんな俺を憎んでもいい筈(ハズ)なのにハルは笑顔で接してくれる。

俺はハルの事がとても嫌で溜まらなくなったことがある。

それは少し昔の話・・・・小６の時・・・・・。

「ハルー。調子はいい？」

いつもの様に俺は、ハルの部屋の扉を開けてベットに横たわるハルに俺はランドセルを被(かず)いたまま、話かけた。ハルは俺が帰ってきたのを嬉しそうに見つめる。

「うん。たいぶ良くなってきたんだ」

「そっかー。じゃ・俺、宿題するから戻るね」と、俺が自分の部屋に戻ろうとした時。

くいっ、と自分の服の裾を引っ張るハル。その瞳には寂しそうな感じがする。

「カズ、行っちゃうの？」

「えっと・・・・、うん・・・・」

「寂しい。カズが居ないと」子犬のような・・・そんな寂しそうな顔をするハル。

「じゃ、もう少し居るよ」

「本当！？ありがとー」

俺はベットに腰かけ、にこにこと笑うハルにいろんな話をした。学校の事、湿った空気の事、雨が降った後に見える綺麗な虹、時々塀の上を通り過ぎる珍しい模様の猫の事・・・そんな話をハルは嬉

しそうに聞いてくれる。

そんなハルを好きだな、って思う。別にそうゆう意味の好きではなくて、にこにこと天使の様に純粋に微笑むハルを見ていいな、って思っただけ。俺もそんな風に笑いたいな。

俺は友達とかに、よく作り笑いをする。相手には分からないような作り笑い・・・。そんな俺が嫌だけど、ハルは違う。まるで天使の様に純粋に笑う。

とても、いいなって思う。

だから俺もハルと居ると、自然と笑顔になれる。この時の俺だけ、少し・・・ほんの少し・・・自分が好きだな、って思えるひと時(とき)でもあった。

・・・・・・・・その時は、俺とハルの関係が崩れるとも思ってもみなかったけど。

俺とハルの関係が変わり始めたのは、父様の事をどう思っているか気づかれたからでもあった。あの時、俺があんな事呟かなければ良かったって今でも、後悔してる。

俺はいつもの様に学校から帰り、靴を脱ぎ捨ててハルの部屋に行った。そしていつもの様に話をする。ハルは純粋そうに笑っていた。そんな笑顔を見て俺は呟く。

「ハルの事好きだなー・・・・」

「えっ？」きょとん、とハルの目が丸くなる。

「いや・・・そうゆう意味じゃなくて、ハルの笑顔が好きだなってっ事」俺は笑いながらそう言った。するとハルの表情がくもる。

「何ソレ・・・・」

「へ？」

「俺の事好きって言ったと思ったら笑顔の事？嬉しいけど、カズ・・・さ、違う意味で『好き』は無いの？俺に対して」

ハルのいきなりの発言に戸惑う俺。え・・・今なんて。

「俺・・・・ずっと昔から・・・・カズの事・・・・」俺の返事も聞かずに、ハルは喋り続ける。

「好きだと思ってる」泡がどんどん弾けるように話が進む。いきないの展開。思考が追いつかない。

やっとその言葉を認識した時、俺は思考が停止(フリーズ)した。

「・・・・・・・・・・え？」

ふっと、ハルは俺に苛立ちの表情を見せた。ハルのこんな表情・・・初めてだ・・・。ハル、が、おかしい。こんなの、ハル、じゃない・・・・・！

途切れ途切れに過ぎる言葉。俺はめまいしそうになった。

その時。

ハルはベットに腰を掛けている俺の手首をぐいっ、と引っ張る。

そのまま俺はハルの方向に倒れる。そして、ハルと俺の唇が重なった。

「・・・・・・・！今・・・・・・何した・・・？」

「キス」

かぁっと顔が熱くなる。・・・・嫌。嫌だ！こんなの・・・ハルじゃない！

俺は何もかも嫌になって・・・目の前が真っ暗になって・・・・どうしようもなくなって・・・パンと弾けたようにハルの手を振り払い、外へ飛び出した。後からハルの声が聞こえたような気がしたけど、すぐに俺の中の声に掻き消されて消えた。

裸足だったけど、何にも考えずに飛び出した。

嫌だ。嫌だ！何もかも！

アスファルトの道が、冷たい。でも構わない。

俺は走って走って・・・・・誰がどんな目をしようと走った。

そんな時。

ドシン！

「痛！」「ぅわ！」

どうやらぶつかったようだ。目をゆっくりと開く。目の前には俺と同じような年代の男の子が倒れていた。男の子は、痛そうにおでこをさすっている。

「だ・・・大丈夫？」

「大丈夫な訳あるか！・・・・ってお前・・・・べしょべしょだぞ、顔。そんなに痛かったのか？」最初は強気な態度で俺に暴言を吐いたが、俺の顔を見てすぐに表情が変わった。

「・・・・え！違うけど・・・・」自分がさっきの事で泣いていた事に気づく。

「お前・・・・名前は？」男の子は何にも無かったみたいにスッ、と立ち上がった。

「一ノ宮・・・・和・・・・」いきなりの質問におどおどと答えると男の子は満足したみたいにニッ、と笑った。

「そっか。俺は水野李玖って言うんだ。宜しく」

「え・・・うん」

「元気が無い！ちょっとこっちに来い！」と、腕を引っ張られた。

とくん

・・・・・・・・・？

今の気持ちはよく分かんなかったけど、不思議な感じだった。えーと・・・何ていえばいいのか・・・・？

とにかく・・・・俺は公園に連れて行かれ、ブランコに座らされた。水野、っていう子が口を開く。

「一ノ宮・・・どうして泣いたんだ？何かあったのか？」

「えっ！いやーあのー・・・・」

「遠慮しなくていいって！な？思ってること全部吐けよ～」

な・なんだコイツは。

別に自分にぶつかった人間くらい知り合いでも何(なん)でもないし、放って置けばいいのに・・・・。

俺はそう頭の中でもんもんと考えていたが、素直に言うことにした。

少しだけ話すつもりだったハズなのに、いつの間にか全部言ってしまった。不思議な事に前よりも心が軽くなっような気がする。ついつい話込んでしまった事に気づき、俺は水野さんに頭を軽く下げた。

「・・・御免。話込んじゃって」

「いいよ、俺も暇だったし」と、軽い返事。

「・・・・そう」

「お前さー。何でも一人で悩むなよ～」

「え？」

いきなりの発言にどくん、と心臓が波打つ。

「だからさ・・・一ノ宮って一人で彼是(あれこれ)悩みそうだし・・・」

・・・・・・なんだ。カンかよ。

俺はクスッ、と笑った。水野さんが「なんだよ！」と顔を真っ赤にして言うのでもっと笑ってしまう。小さな笑い所ではなく、もう大笑いになっていた。

こんなに笑うのって久しぶりだ・・・。しかも、いつもはハル以

外作り笑いだったけど、またまた久しぶりに自然と笑えた。

「な、なんだよっ／／／」

「あはは」

「なっ・・・」ますます顔が赤くなる。面白い。何(なん)でか知らないけど。

「こんなに笑ったの久しぶり」

「そうか・・・なら良かったよ」赤くなっていた顔が笑顔に変わる。やわらかい・・・ハルみたいな笑顔。そして水野さんはブランコから降り、立ち上がった。

「じゃ、行く。また会おうな」

「え・・・行くの？」

「あぁ」

「そう・・・・またね・・・」

「あ・言い忘れてたけど」

「え？何？」

「お前の事好きだよ」

「えっ／／／／」

「いや、そういう意味じゃなくてさ。お前の笑顔が好きって事！」

「え・・・そっか・・・」

って何ガッカリしてるんだよ／／／

・・・・・・・え？

この台詞（セリフ）、どっかで聞いた・・・

あ。

なるほど・・・・・そういう事か。

頭の隅に残る台詞（セリフ）。俺はその言葉を思い出した時にすべて分かった。ハルの気持ち。そして俺の気持ち。

俺・・・・水野さんの事好きになってしまった・・・・って事。

少し昔の事を思い出しているうちに口元が緩んだ。

春人との問題はまだ解決していないけど。

俺はその時からハルの事を〝春人〟と呼ぶようにした。

ハルとはあまり喋らなくなったけどそれでも良いかも、と思う。

それから李玖が女になっていた時は正直驚いた。だって李玖は男だったんだから。

でもって李玖の男だった時の事を皆覚えていない。

だから俺は神様がチャンスをくれたんだと思う。

李玖が女になってくれたのも、（多分）俺しか李玖の男だった頃を覚えているのもチャンスだと思う。

だから俺は、あの時誓ったんだ。李玖の事を・・・・

俺が思い出にふけっていると隣から李玖の声。

「一ノ宮ー」

「ぅわ！」

「何ぼっーとしてんだよー」

「別にー。李玖の事考えてただけ」

「うわー。コイツ元に戻りやがった！せっかく人が慰めてやったの

に」

「いいじゃん。李玖って今日ヤケに優しくない？俺に」

「なっ・・・！違う！」

「何が？」

「・・・・っ！帰る！」と、真っ赤になって、李玖はブランコから降りた。そんでもって一言。

「お前さー。何でも一人で悩むなよ」

「・・・・・！」

「じゃな」

「あぁ・・・・ありがと」

俺はそう言い、少し昔の李玖の言葉を思い出す。

『お前さー。何でも一人で悩むなよ～』

そう思い出し、口元がまた緩む。

・・・・・全然変わってないな。李玖。

軽く伸びる。眼中に空が映った。空は夕日に染まっていた。

「李玖っ！」

俺は李玖を呼んだ。その時、公園を出ようとしていた李玖がパッと振り向く。

逆光で顔が見えにくく、眩しい。

俺は走った。李玖の隣まで来たとき・・・小さな桜色の唇に軽くキスをした。

「なっ・・・・」

「賭けは俺の勝ち♪」にやっと俺は笑ってみせるとそのまま駆け出す。

「ちょっ・・・待てよ!」

李玖の言葉も聞かずに俺は走る。

だから俺は、あの時誓ったんだ。李玖の事を・・・・

俺だけのモノにするって。

１２話　俺とハルと春人と。（後書き）

実を言うと一ノ宮はこの作品にでないキャラだったんですが、何故か今・・・出ています。（問題発言）しかも双子って；；＆ネット小説の人気投票に参加しています～。投票していただけると励みになります。（月１回）

13話　お買い物日和！<1>

「いいお天気だわ～♪」

「いいお買い物日和ね～」

「そうだな・・・・ってなんで君達が居るのかな？俺らのデートに」

「・・・・デートは一日だけだ。分かったか一ノ宮？」

「はいはい分かってるって～♪」

こんな感じで、天宮さん・紅葉・一ノ宮・俺・・・という計四人でとんでもなくデカイデパートにお買い物に来ている。（一ノ宮がいうにはデートらしい・・・・）

どうしてこうなったのかというと、昨日一ノ宮が俺にピー（思い出したくないので伏せる）をした時から始まる・・・・。

＊

俺は、一ノ宮とすれ違ったときに何が起きたか正直よく分からな

かった。

分かったのは・・・・・

・・・・・・柔らかい。だけだった。

突然ふにっと唇に何か押し付けられて。そんでもって一ノ宮がニヤっ、と笑って・・・・。

・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・・！

・・・・・・・・・キス、だったのか？今の。

そう思うと、顔が耳まで赤くなるのが自分でも分かる。

頬が、熱いよーな熱くないよーな・・・・・・・・。

・・・・じゃなくて！

賭け・・・・・・・・負けた・・・・！たしか、賭けたのは・・・・・・・

俺は数日前の事を脳をフル回転し、思い出す。

『俺が李玖の唇奪えたら俺と付き合う、ていう賭け。そんでもって奪えなかったら李玖の事構うのやめるよ。期限は一ヶ月。これでいいねー決定～♪』

・・・・・・・・・・・・ぅげ！何だソレ！！

ちょっと酷いぞこの賭け！なんか俺が振り向きざまにキスすんなんてずりーぞ！

・・・・・・これは負け惜しみとしかいいようがないな・・・・・・。

俺はここにいても仕方ないので、一旦家に帰って休む事にした。

・・・・きょうは帰ってご飯食べて・・・・寝よ。

とぼとぼと歩く。なんだか夕日が背中を押してくれてるみたいだった。

家に着くと、母さんが「おかえり」の一言も言わず、スリッパの音を荒ただしくパタパタと音をたてながら走ってきた。

「母さん、ただいま」

「え？声が小さいからよく聞こえなかった・・・・じゃなくて、そういうのは別にいいでしょっ。ハイ！これ、電話。帰ってないから断って切ろうかと思ったんだけど。丁度いいトコにきたから早く出なさい」

それだけ母さんは言うと、手に持っていたコードが付いていないタイプの電話をずい、と差し出した。

「・・・・・はぁ」母は冷たいなー・・・・（泣

俺はしぶしぶ電話を受け取ると、そのままのろのろと階段を上っ

た。後(うしろ)から母さんの声。「お買い物行ってくるわね～。鍵閉めていくから」

「・・・・・・・もしもし？」

『あ、俺』

ブチンっ！

俺は奴の声を聞いた瞬間に、凄まじい速さで電話を切った。ゼェゼェと荒い息を立て、部屋に転がり込む。

その時。

プルルルル・・・・

・・・・・・・・・・・・・・キタ。

俺はどうしようか迷ったが、このまま学校でも無視するのはお互い気まずいので電話に出る事に。

「・・・・・・・もしもし」早く切りたい早く切りたい・・・・・。

『あ、俺。一ノ宮だよ。どうして切ったの～？もしかしてイタ電とかにあってるとか？』

「それはない！いや絶対に！！」

『・・・あぁ、そう。それならいいけど』

「・・・・・で、何の用？」

『あ！そうそうさっきのキスの事だけど。賭けで』

ブチン！

俺はまたまた凄まじい速さで電話を切り、素早く留守電モードにした。

やばい・・・・・・。

賭けに負けた＝一ノ宮（イコール）と付き合う・・・なんだっけ。

「あ～～サイヤクだ～～！」俺はベットにダイブすると、電話を机に置いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうしよ」

俺が困りかけた顔で窓の方に目をやる。

雲一つ無い青い空。

その空の中に黒い点が一つ見えた。

その黒い点はだんだん俺ん家の窓に近づき・・・・・・――――

バリーーーーーン！

「・・・・・・・・・・・・・窓・・・・・が・・・・・・・・・」

窓は派手に、そして大胆にソレは窓を割って飛びこんできた。そのままの勢いで壁にブスッ、と突き刺さった。窓の付近にはガラスの破片が無残に飛びちっている。

ソレは矢の様だった。長細く、尖った先端。その後の方には何やら紙が神社のおみくじの様な縛り方で結びつけられていた。

なんだ?、と思いそろそろと近づいて紙を解いた。紙の中にはなにやらワープロで打たれたような文字があった。

俺は迷わず読んでみるとこんな事が書いてあった。

≪李玖へ

どうせこうなるだと思っていたので、この手段をとらせて頂きました。窓の修理代を俺が出すからご心配無く。

そんでもってさっきの事だけど、やっぱ付き合うのは止めていいよ。だけど条件がある。

一日俺とデートしてよ。これ位ならいいでしょ李玖も。明日@デパートで待ってる。

一ノ宮より》

こうして俺は明日@デパートで待っていた所、偶然（？）通りかかった紅葉と天宮とも一緒にお買い物（デート？）している訳だ。

とにかく・・・これから大変な事が起こりそうな予感は嘘だろうか・・・・・・？どうか平凡に終わってほしい。

１３話　お買い物日和！＜１＞（後書き）

お買い物日和！編が始まりましたｗそーいえばＨＰ作りました→ｈｔｔｐ：／／ｓｔｂｍｄ００９．ｒａｋｕｒａｋｕｈｐ．ｎｅｔ／です。暇な方を来てくださいなｗ（＾＾＊＆ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。（月１回）

１４話　お買い物日和！＜２＞

俺達は天宮さん・紅葉・一ノ宮とデパートの中をフラフラ歩いていた。そして何故か三人は俺の腕を引っ張り、睨みあっていた。

「お前等ー今日は俺と李玖のデートなんだからさー。いい加減手ェ離せよー」

「「「い・や・だ！」」」

「だって私達李玖の事気に入ったのだわ～。ね？紅葉ちゃん」

「え・・・あたしは・・・そういうのではなく・・・」と、何故か顔を赤らめて俯いた。どうしたんだろ・・・。

「じゃ・いいじゃんかー。俺と一緒に回るし！しかも最近二人とも出番無かったし二人とも影薄すぎ！それに光は新キャラのくせに、俺と比べて出番少なすぎだ！ばーかばーか」一ノ宮は機嫌悪そうに（てか悪い）俺の手を引っ張り、一ノ宮の方に寄せる。その表紙に二人は俺に絡み付いていた手をパッと離してしまった。

「ちょ・・・李玖嘘でしょデートなんて！しかも最近で出番が少なくてなんとなーく影薄いのは作者の問題！」紅葉がさっきの様子とは一転し、せきたてる様に俺に尋ねながらも、一ノ宮に言い返した。

「そーよそーよ～。作者って本当に最近更新少ないし、しかも私が新キャラなのにあんまり出さしてくれなかったし・・・それに私の事皆分かりきってない事たくさんあるわよ～」と天宮さんもため息を付きながら頷く。（分かりきってない事って何だ・・・・・）

「嘘じゃないって！証拠に李玖に聞いてみたら？」一ノ宮の発言に皆の視線がギン！とくる。

これって・・・・・一番答えにくいんじゃ・・・・・・・

俺は唾を飲み込むと一息つく。その後にどうしたら皆が納得する答えがだせるか・・・・少し考える。

お・そうだ！

俺はピカン！と電球がついた様に俺は閃く。（古い；）

「喉渇いたなー。腹減ったなー・・・・」俺は皆に聞こえる様にボソッと呟く。

その瞬間に天宮が「ジュース買ってくるわ！」と走りだし、紅葉は「なんか食べ物買ってくる！」と走り去った。一ノ宮の裾を軽く持ち、一ノ宮と俺だけを取り残し、二人が去った後俺はめんどくさそうに近くにあったベンチに座り込んだ。

「この後どうすんの？」

「え・もしかして李玖・・・・・。俺と2人きりになりたかっ・・・・うっ」

俺は一ノ宮の発言を止める様に腹に一発殴った。

「だーかーらデートなんだろ？一ノ宮はこれでいいのか？一応賭けに負けまたし、やるだけの事はやるだけの事はやらな」と言いかけ、一ノ宮に視線を移しかけた時。一ノ宮は小さく笑っていった。

「な・・・っ。なんで笑うんだよっ／／／」俺は何でか耳まで熱くなるのが感じた。どうしたんだよ一体。一ノ宮は俺の隣にストン、

と座ると返事をした。

「いいよ。４人の方が楽しいし。それに・・・・――――」と言いかけた所で天宮さんと紅葉の声。

「「ストップ！」」

「・・・・・あ、おかえり。早かったね」一ノ宮は意地悪そうな笑みを浮かべながら、ゼィゼィと肩で息をしている二人を見つめた。

「早かったねじゃないわよ！」と、天宮さん。手には飲み物の入ったペットボトルが４つ握られていた。「そうそう！一ノ宮さんだけ二人きりになりたかったから残ったのね！ズルイ！」と、紅葉。そして手にはマクドナルドの紙袋が持っていた。

「え～そうでもないし～。てか、李玖から『二人っきりになりたい』て言われたんだし～」からかう様な口調で肩をそくめた。俺は「違う！」とだけ言って、一ノ宮の頭をがんと殴ってやった。それでもって一ノ宮が『二人っきりになりたい』と言ったトコで紅葉はびくんとしたが、俺が一ノ宮の頭をガンと殴った時にはいつもの紅葉に戻っていた。

俺は風邪でも引いたのかと思ったが、すぐにベンチから立ち上がった。

「じゃ・もうすぐ昼頃だし紅葉達の買ってきた食料で一息つきますかっ」

「「「イエッサー！」」」三人同時にハモル。これだけきっちり声

がそろってると気持ちいいなーとか思いつつ、1階の広場の所に俺は向かった。

＊

一階の広場・・・『太陽の広場』と、呼ばれている。この広場からは、7階まである天井が吹き抜けで見える。天井には華やかに風船のような物がたくさん括りつけてあり、とてもカラフルだ。そしてこの『太陽の広場』は、太陽のような１０メートルくらいありそうな大きな時計が床に取り付けられていて、時々俺は時計が壊れてしまいそうで恐い。けど、壊れるという事なこのデパートが出来てから一回も無く、強化ガラスの様なモノで覆われているので安心だ。そして広場には丸い木で出来た机と椅子がずらりと並べてあり、ここでは飲食自由。俺達にはうってつけの場所だ。そんでもって空いている席に座ると、紅葉の買ってきたマックを皆に配った。その時俺はマックの量が異常に多い事に気がつく。しかもそれはほとんど紅葉の分。俺達三人の分はハンバーガーとチキンとジュース位なに、紅葉はその何倍もありそうな量を自分の前に並べていた。

「・・・・・紅葉」

「ん？どうした？李玖～」

「多くないか？ソレ」と、俺は紅葉の前にズラリと並べてあるマックを指差す。周りを見回すと天宮もちょっと引いている。だが一ノ宮は以外に平気だった。

「多くない！普通普通！」

「・・・・・そう・・・ならいいけど・・・」

「足りなかったら分けるよ？李玖達の分超少ないし」紅葉はチラリと俺達のマックに目線を向ける。

「「い、イエ！遠慮しておきます！」」俺と天宮さんは（何故か）敬語になり必死で遠慮した。一ノ宮は優雅にハンバーガーを食っていた。

俺はチラリと一ノ宮に目線を向ける。「・・・・お前さー・・・・なんか落ち着いてない？」

「えー。そう？」一ノ宮はこちらに目を向ける事も無く、パクパクと食べ続けていた。

「・・・うーん・・・・二人なんかあったっしょ？」俺はハンバーガーを食べながら、すっかり喋らなくなった紅葉を見た。なんだか紅葉って食べると凄いな・・・・・。

俺はもぐもぐと食っていると、天宮さんお目が獲物を見つけた野獣みたいにキランと輝くのが目の端で見えた。

「ケチャップついてるわ」天宮さんは俺に顔を近づけてると顔についていたケチャップをペロ、と舐めた。今まで平然とマックを食っていた紅葉と一ノ宮はその様子を見た時、ショックを受けた顔をした。きっと漫画なら背景に『ガーン』というでっかい文字と、縦線がたくさん書かれているだろう、きっと。

俺はあまり気にせずにさらりと一言。

「天宮さんケチャップなら自分でとれるから、今度からは言葉で言ってよ」天宮さんは一ノ宮そっくりの意地悪そうな笑みで「は～い♪」と返事をした。うん、ここらへんはイトコだな。

「李玖、そんなサラリと受け流すなよ！それに光！・・・少し前に知りあったばっかなのにそんな事していい・・・・もごっ」一ノ宮が言いかけたその口に天宮が手元にあったハンバーガー（＊紅葉の）を突っ込み、膝を蹴る。

紅葉は「あたしのハンバーガー！」と悲鳴をあげた。「え・そっち？；」俺は呆れながら紅葉を横目で見た。

そんな様子に天宮さんはクスクスと笑いながら、口を開く。

「ね・食べ終わったらどこいく？」

「服買いにとか？」最後のハンバーガーを一ノ宮の口に入れられてしまった紅葉は機嫌悪そうに答えた。一ノ宮は口に入れられたハンバーガーを一生懸命飲み込んでいた。俺はサラリと受け流し、話に乗る。

「最近新しい映画でたし映画見ないか？」
「そうね～。服は荷物になるし」
「あたしもそれで賛成！」
「俺も・・・」と苦しそうに一ノ宮が返事をした。

と、いう訳で俺達は軽い足取りで（＊一部除く）映画館へと向かったのだった。（大変な事が起きていないだけ平和平和ｗｗ）

１４話　お買い物日和！＜２＞（後書き）

新キャラのくせに全然出てなかった天宮さん．．．（ファイトｗ＾＾＊）そして更新がなんとなく遅くなっています．．．（泣　そんでもってコメントなど頂けたら嬉しいですｗ＆ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。（月１回）

１５話　お買い物日和！＜３＞

「わ～広～いっ！さすが大型デパートの映画館～！」映画館に着いたとき、紅葉がわっと歓声をあげた。

「広いわね～。でも都会の方はもっともっと広いと思うわ～」天宮さんがにこにこと微笑みながら頷く。

俺は二人の会話を聞きながら、周りをぐるっと見回す。一ノ宮がいない・・・。

「な・一ノ宮は？」

「あぁ。トイレにいってたわ～。そんな事よりも早く映画決めちゃいましょ」軽ーく一ノ宮の事を受け流す天宮さん。そんな事よりもって・・・・・

映画館は薄暗い場所で通常の明るいライトでは無く、いかにも暗闇とマッチしそうな紫色のライトになっていた。

俺達は今日入る映画の内容が書かれた紙を貰ったので、その中から選ぶ事に。映画は今日あまり入らないらしく、一つ目は超ホラー・二つ目は超感動物語・三つ目は超恋愛系・四つ目はアニメっぽい映画・五つ目はジャンルはよく分からないが、「ピヨピヨ物語」というものだった。（なんだこのネーミングセンス・・・・）

「どれ見る～？」

「私はどれでもいいわ」

「あたしも～！」

「って事は俺が決めてもいって事？」

「「ＯＫ～」」何故か英語で返事。俺はつっこみもせずに映画の内容が書かれた紙に目を通した。

・・・・どーしよっかな～・・・・。

「じゃ・このホラー系ので！」やっぱホラーだろ！と思い、いかにもホラーっぽいばさばさした前髪をたらし、顔が全然見えなくなっている女の人が写されていた。見えるのは白目になっている片目だけ。白い着物には血がばしゃっとかかっていた。俺がそのホラー映画を選んだ途端天宮さんはさーっと血の気が引いた顔になった。

「・・・・え、もしかしてホラー苦手なのか・・・？」俺はおそるおそる尋ねながら、青い顔をしている天宮さんの顔を見る。７

天宮さんはぶんぶんと横に首を振り、「全然！」と言った。俺には相当無理している様な・・・。紅葉は「いいよー」とかなんとか。

その時一ノ宮が俺達の元へ走ってきた。

一ノ宮は映画の内容が書かれた紙をちらりと見ると、「決まった？」と俺に聞く。

俺は天宮さんを刺激させない様にヒソヒソとなるべく小さな声で伝えた。すると一ノ宮はニヤっと笑い、「光はホラー苦手なんだよ。小さい頃見に行った時なんか・・・」と言いかけぷっ、と小さく吹き出した。そしてにっこりと微笑む。「とにかくいい気味だよ。だ

ってさっき俺に無理矢理ハンバーガー押し込んだ件の仕返しにもなるし・・・そーだ。写真撮っておこう！」

「楽しそうだね・・・・」

「もちろん！」

「・・・・・そうか・・・・」

「じゃ・映画の券買ってくるから李玖達は食べ物とか買ってて」

「ん、分かった。じゃ、紅葉と天宮さん行こうか」と、振り向くとカチンコチンになった二人が居て、なんだか可笑しくなった。一ノ宮の気持ち今なら分かるかも。

「うん！」「・・・・分かったわ・・・・」

元気いっぱいの紅葉に対し、天宮さんはよろよろと重い足を運ばせた。その時天宮さんのバックからポロリと何かが落ちる。

「？」

天宮さんは気づいていなかったので、俺はその何かを拾った。

何だー・・・生徒張かぁ・・・って、ん？

男？

生徒張に写っているのはまぎれもなく男の写真で。でも氏名は天宮光で。

・・・・・・・・・・・？

「天宮さん、これ・・・・・もしかして・・・・・・」

天宮さんはロングの髪をふらりと揺らしながら俺の方を向いた。

「あ、私の・・・」

「落ちてた。っていうか・・・・男の写真みたいなんだけど・・・・。もしかして間違えて入れた？」

「え、それ私よ」

「生徒張に写るものだからやっぱ女装は止めなさいって言われたのよ～。男のカッコなんて私らしくないのに～」

「・・・・・・えっとつまり・・・・・・天宮さんは・・・・・・」

「男よ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！

！！！！！！！！

俺は天宮さんの少し前の言葉をふと思い出す。

『私の事皆分かりきってない事たくさんあるわよ～』と。

１５話　お買い物日和！＜３＞（後書き）

なんか変なトコで切れました；このセリフはこうゆう意味なのです。＾＾＊問題解決！（１４話　お買い物日和！＜２＞に書いてありますｗ）＆ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。（月１回）

１６話　お買い物日和！＜４＞

俺は天宮さんの少し前の言葉をふと思い出す。

『私の事皆分かりきってない事たくさんあるわよ～』と。

天宮さんは俺の目の前に顔を近づけ、にやりと笑った。

「気をつけてね～。あんまり可愛いと襲っちゃうかもしれないわ」

「・・・・っ／／／／／／」

俺はからかわられているのか本気なのか分からない天宮さんの思わぬ発言に顔がボッと火がついた様に赤くなる。

＊

あたし、菊来紅葉（きくらいもみじ）。

この前はあたしばかり出てて主人公っぽくない？とかなんとか思ってたけど最近超出番が少ないと思う！とくに９話～１２話！全然出番無いじゃない！

あ・それはさておき、今の状況を説明しまーす。

今、何故か天宮さんと李玖が良いムード。二人は何か顔を近づけて話している。

・・・・・・・・・・・ムカ。

何だか知らないけどさっきからムカムカする・・・・。どうしたんだろ、あたし。

トイレ行ってこようかな～とか思ってたら、李玖が顔を真っ赤にしてた！

ずんずん李玖と天宮さんの間に割り込み、すばやく話題を変える。

「ね、ポップコーンでも買わない？」

すると李玖がホッとした顔で賛成。「ん、賛成」

でも天宮さんは不機嫌そう。ジロッとあたしを見てる。思わず睨み返してやったら天宮さんも睨み返してきた。

漫画とかだったら絶対あたしの目と天宮さん目に電気みたいのが伝ってて、背景にはバチバチバチとか出てるな。きっと。

先に天宮さんから視線を離した。一瞬の出来事だったけど何分も経ってた様な気がした。

そんな場を落ち着かせるかの様に李玖が口を開いた。「俺が皆の分買ってくるよ何がいい？」

あたしは李玖に気遣いされたのがなんだか恥ずかしくて、首をぶんぶん横に激しく振った。

「いいよいいよ！あたしが買ってくる！買いたいモノばんばん言って！！」と、財布をごそごそバックから取り出す。

「あ、あぁ・・・。どしたの？急に無理しなくても」

「なんでもない！」

「・・・・・・そう」

「じゃあ私はキャラメルポップコーンとコカ・コーラで」

「俺も。一ノ宮も多分同じのにしといて」

「わ、分かった・・・」

あたしはレジに向かって軽く走りだした。レジに着いた途端レジのお姉さんがニッコリ。

「いらっしゃいませ。ご注文は何に致しますか？」

え、えーっと多分李玖達はキャラメルポップコーンとコカ・コーラだったよね。

「キャラメルポップコーン（S）とコカ・コーラ（S）それぞれ3つずつ。えと、それとキャラメルポップコーン（L）と祖味のポップコーン（L）、コカ・コーラ（L）、ドーナッツにフェイク一番大きいの下さい。それぞれ1つずつで」

レジのお姉さんはレジのボタンをピッピッと押しながら喋る。

「キャラメルポップコーン（S）とコカ・コーラ（S）それぞれ3つずつ。えと、それとキャラメルポップコーン（L）と祖味のポッ

プコーン（L）、ココカ・コーラ（L）、ドーナッツにフェイク（L）ですね。それぞれ1つずつで」

「はい」

「シェイクは何味でしょうか？」

「えと、いちご味で」

「分かりました。少々お待ち下さい」

ピッ、とボタンを押してレジの後の方へと向かうお姉さん。そしてカゴにジュースやらポップコーンやらを詰めてまた帰ってきた。

そしてお金をお姉さんに出し、食べ物を貰って李玖達の元へ。それと同時に一ノ宮が券を貰って帰ってきた。

「もうすぐ始まるね。もう行く？」一ノ宮さんが腕時計をちらりと見て皆に微笑み、あたし達は頷く。

そしてあたし達は歩き出した。一ノ宮さんはなんだか嬉しそう。そして天宮さんは真っ青。李玖はいつもと変わらないかも。

あたしは歩きながらいろいろ考えていた。

数日前の事、とかね。

一ノ宮さんがマックで奢ってくれた時の事。

『李玖の事好きだよね？菊来って』

何気無い一言だったけどあたしはその一言で結構悩んでいた。

好き・・・・・・・・・？

李玖の事・・・・・・・・・・・？

そう考えると頬が熱くなる。実のことを言うと、李玖に初めて出会った時もこうだった。

新学期の時の李玖の後姿(うしろ)を見て・・・・・ビッと電流が走った感じがした。

どくん

同時に頬が何だか熱くなる。

仲良くなりたくて。話しかけた。

『あ・水野さんって2組だよね～アタシもなんだ！一緒に行かない？』と。

１６話　お買い物日和！＜４＞（後書き）

更新が遅くなりました；天宮さんの言う通りですねｗ（苦笑
それとなかなか話が進みません・・・・××もう＜４＞までいっちゃいました；　買い物日和！編、長過ぎだー・・・・・・；；；；&
ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。（月１回）

17話　お買い物日和！＜5＞

俺・・・水野李玖（みずのりく）は只今、映画館の劇場内にいます。まだ映画は始まっていない。そして劇場内の席のど真ん中の席に右から一ノ宮、俺、天宮さん、紅葉・・・という順番に座っていた。

劇場内は割と静かで、ポップコーンなどのポリポリという音しか聞こえない程だ。

そして俺は現在、劇場の画面をじぃっと睨めっこしながら音をたてない様にポップコーンを食っていた。

もぐ・・・・・・パ・・・・・・パリ・・・・・・・

「何してんの？李玖・・・・」

隣から一ノ宮の声。多分俺の方を向いていると思うが俺は口に入れたポップコーンをできるだけ音がたたない様に歯を上手に動かし飲み込む。

「・・・・止めたら？何か変な顔してるけど」

「うるせー。俺はポップコーンを音をたてずに食うのが好きなんだよ」

「はいはい。つーか俺と李玖以外喋ってないネー・・・。悲しいからキスでもすっか」

「お前は少し静かにしろ。誰がお前とキスなんかするか！」と、一ノ宮に俺は空手チョップ。ゴンという鈍い音が小さく響く。と、やりながら俺は隣の席で静かにしている二人を横目でちらりと見た。

天宮さんは俺と同様劇場の画面をじぃっと睨めっこしている。劇場内だからか知らないが、天宮さんの表情は堅くなんとなく青白い。漫画とかだったら縦線がたくさん入ってる、と思う・・・・・。それに対して紅葉・・・・・は恐くて静かにしているというよりもわくわくしているっつー感じだ。

俺はキャラメル味のポップコーンを口に放り込む。すぐには噛まずに、口の中で転がす。するとじんわりと味が口の中に広がった。

甘くて・・・・なんか苦い。

――ジィー。

そう思った所で放映の音が鳴った。

天宮さんはビクッと体を震わせた。まず株式会社の文字がドアップに映る。それでもってオープニングの映像が。それからしばらくの間を置いて井戸がぼぉっと映った。

おぉ！これはなかなかのホラーでは？いつも見ている2倍位のレベルかも・・・。

長い髪の女がぼわっと映る。それから血がばしゃっ吹き出し、画面は血だらけになる。そのまま血だらけの画面にぼんやりと文字が映った。画面はブレてなんだか見にくい。

天宮さんは、まるで石の様に固まったまま画面をじーと見ている。平気そうだな、と思った俺。だかこの思考は間違いだった。

「天宮さん？平気か？」天宮さんに近付いてこっそりと耳打ちする。

だが天宮さんは俺の方を見向きもせず、ぼーっと前を向いている。

「・・・・・・・・・」

「おーい・・・」

まるで魂の抜けた人間の抜け殻みたいだな・・・とかなんとか思いつつも呼びかけるが、硬直したままでピクリとも反応しない。

・・・・・・？

そう瞬間(とき)だった。

「きゃあぁぁぁあああーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！もがっ」

天宮さんが急に叫びだしたので俺は弾の様な速さで口を素早く塞ぐ。そんでもって一ノ宮が弾よりも素早い仕草でパチリと写真を撮った。その顔をなんだか満足そうだ。俺は天宮さんの手を取るとぐいと引っ張り席を立つ。

その様子に気づいた紅葉に耳打ちする。

「天宮さんの様子が落ち着くまで外いるから。紅葉達は映画見ててよ」

「・・・・うん。分かった」

何だか不満げの様子なのだが、天宮さんの様子がおかしいのを止めたいので俺はそのまま出口へと行った。

そして映画館外にあるのベンチに天宮さんを腰をかけさせた。

「・・・・・ありがと」天宮さんは小さく呟く。俺はその隣にトスンと座る。
「それほどでも。っていうか様子変だったけど」
「・・・・ホラー恐怖症なの。詳しくいうと、ホラー映画恐怖症、ホラービデオ・ＤＶＤ恐怖症。いい加減コメディモノとホラーモノを新作だからって並べないでほしいわ・・・・。それとホラーＣＷ恐怖症・・・何の前触れもなく流すの止めてほしいのよ・・・」
それだけいうとはぁ・・・・とため息。
「御免・・・俺がホラー映画選んじゃって・・・」
俺は少しばかり後悔した。
天宮さんがホラー恐怖症って知った時、嫌でも違う映画にすればよかったのにな・・・・。
「いいのよ！大丈夫よもう。私がホラー恐怖症だって言えば良かったわ・・・正直に。李玖ちゃん有り難う。・・・・・・優しいのね・・・・」と、優しく微笑む。まるでタンポポみたいな笑顔だ。
俺はその見たことの無い笑顔にドキッとしてしまう。お、落ち着け！冷静に・・・。
すると天宮さんは立ち上がり、「ジュース買ってくるわ。待ってて」と駆け出してしまった。

＊

あたし・・・　菊来紅葉（きくらいもみじ）は映画を見ながらぼんやりと椅子に寄りかかる。ふかふかの椅子は座り心地が良い。さすが大型デパートだな、とか思う。

『あ・水野さんって2組だよね～アタシもなんだ！一緒に行かない？』

ふと頭の中にその言葉が浮かぶ。

「・・・・・一緒に・・・・・か」と、あたしは誰にも聞こえない位小さく呟く。あたしの呟いた声は映画の音ですぐ掻き消された。

新学期・・・・・・――――――。

頬が何だか熱くて。同時に心臓の音がいつもよりうるさくなった。

李玖の後姿(うしろ)を見て。

この気持ちが『好き』ならば、これは『一目惚れ』なのかもしれない。

どくんと、心臓が高鳴るのは初めてで戸惑った。同時に目が離せなくなる。

そのまま足が動いて、口が動く。まるで自分のモノでは無いみたいに。

声をかけるとストレートのロングヘアがふわりと動き、あたしに向かって振り向く。

どきっ

「・・・・・・っ！」

綺麗。綺麗すぎる。美少女だった・・・・どうしよ・・・・！

とか更に戸惑うあたし。だけどその人はぼんやりと自分の世界にひたっていて、「え・そうなんだ・・・2組なのか～自分は。初めてなったなー2組・・・」とかいろいろ言っていた。

・・・仲良くなりたいなー・・・とか思った。急に。

「水野さん？」

「あ・御免御免・・・・OーK。えと・・・」

「菊来紅葉（きくらもみじ）よ！宜しくね、水野さん。あ・李玖ちゃんって呼んでいいかな？」思いっきり明るい声をだすあたし。ニッコリと微笑んでみせる。うん、なんだかいいぞ自分！

自分で自分を褒めてみせる。なんだか気分が良い。

だけど、

これが始まりだった・・・・。李玖との出会いが、こんなにも・・・・大変になるとは思ってなかった・・・。

＊

数分後。

天宮さんが息を切らしながら走ってきた。その手には紙コップ。

「はい。ジュース」と、俺に差し出してくれた。俺は「サンキュ」と言うと紙コップを受け取った。そして天宮さんが俺の隣に座る。ニコニコと笑いながらじっと見つめてくる天宮さん。俺は飲もうとしたジュースを止めた。

「・・・・飲まないのか？ジュース」
「え？もう一個欲しいのね。私のあげるわ～」
「え、そういう意味ではなく」
「ふふ、いいから早く飲んで飲んで～」
「・・・・・・？」

ごくっとイッキに飲み干す。

・・・・・・・・？変な味だ・・・・・。

俺は天宮さんの方に向こうとした、だけど。

ガクンッ

「え、」

なんか、力が。

目の前ではニッコリと悪魔の様に微笑む天宮さんがいた。
「ふふ。李玖ちゃんの事気に入っちゃった☆このままお持ち帰りするわ」

「あま・・・」

天宮さん、と言いかけて目の前が真っ暗になる。

気を失う前に天宮さんの嬉しそうな声がした。

「やったわ～。睡眠薬混ぜておいて良かった♪」と。

１７話　お買い物日和！＜５＞（後書き）

買い物日和！編終了ｗｗ早いモノでもう１７話まできました＾＾＊
本当はここらで終わらす予定だったのですが、予定がずれて１７話まで・・・＾＾；＆ネット小説の人気投票に参加しています。投票していただけると励みになります。（月１回）

18話　罠に掛かった兎

遅い・・・・。
俺・・・一ノ宮和は妙にいらいらする気持ちを抑えながら席を立った。
もう映画が終わったというのに・・・・遅すぎる・・・・。
「遅いね・・・李玖達」
菊来も同じように席を立つ。
「・・・・そうだね」
何かがおかしい・・・・。
光は相当の恐がりだ。それは分かる。
だが本来の光だったら・・・・絶対に見ないでおくと思う。
・・・・もしかして。
「・・・・菊来」
「ん？」
「どうして俺らがこのデパートにいるって分かった？」
「えーと・・・それはー・・・・・」
「嘘は付かないでね」
「天宮さんが・・・言ってたから・・・・」
「・・・！それ本当？」

ってことは・・・・

「菊来」
「え？さっきからどしたの～？」
「全部罠だよ。光のね」そして俺は小さく微笑んで見せた。

＊

眠たい。かなり。

俺が激しい眠気を戦いながら目をうっすらと開けた。

・・・・どうやら自分は眠っていた様だ。

真っ白な天井に向かって軽く伸びた。それと同時に瞼がまた落ちてきそうになる。

それにしても。

「ここはドコなんだ・・・一体・・・」

俺はゆっくりと蘇える記憶をフルスピードで思い出そうとする。

「確か・・・・天宮さんとベンチに座って・・・それで・・・」

天宮さんから渡されたジュース飲んで・・・・・。

・・・・・・。

思い出した。あの時、睡眠薬入りのジュースを飲んで倒れたんだ多分・・・いや絶対。

俺は重い腰を持ち上げあたりを見回す。

・・・・・・・白い。周りじゅう全部白ずくしだ。

白いベットに白いカーテン。白い床に白い壁。家具はタンスと本棚と机位・・・だな。

俺は自分の服装が変わっている事に気がつく。

「・・・・・これは・・・・」

白いモコモコ？いや、ドレスか？・・・・何で俺がこんな服を・・・って今は女だ。

ベットから降りるとドレスの淵がぶわっと広がる。うわー・・・妙にスカスカしてて気持ち悪い。

その時カチャリと扉が開いた。
「あ、天宮さん・・・」
そこには紺色の着物姿の天宮さん。にっこりと微笑んで俺を見ている。
「やっぱり似合うわねー。どう？ウエディングドレスは？」
「・・・・・は？」
「そのドレスの名前・・・知らないの？李玖ちゃん・・・」
「え・ハイ。この服って天宮さんの趣味じゃ・・・」
「えー違うわよぉ。その格好（ウエディングドレス）で分かんない？」
「もしかして・・・・」
「あは☆結婚しましょ？って事よー♪私はね・・・和みたいな慎重派でもないし、紅葉ちゃんみたいな鈍い子じゃないのよ～☆欲しいモノはすぐ手に入れるのがモットーよw」
「は・・・・？」
じり・・・・と近付いてくる天宮さん。俺は後ずさりをするが背中には壁。
どうしよう・・・・。
俺が色々考えているとポチ、と指先にボタンの様なモノに触れた。すると壁がぐりんと勢いよく回り俺はそのまま一緒に回る。
天地が・・・・ひっくり返る。
「うわぁぁぁあああ！！」
「李玖ちゃ・・・ま、いっか☆」

プツン

俺の記憶をそこでまた途切れる。それにしてもま・いっか・・・って（涙

＊

天宮光(あまみやひかる)・・・つまり私はそのまま立ちすくんだまま腕を組む。
「良い考え思いついちゃったかも・・・」
私はそういい残し部屋の壁に付いているレバーをぐっと引く。するとバカッと壁の一部が開きボタンがずらりと出てきた。
「後はこれを・・・」私は慣れた手付きでボタンをパチパチ押す。その内、ビーという音がした。
「これで完了っと・・・」
そのまま向きを変えて私は部屋を出た。私の計算が正しければまた李玖ちゃんは気絶してるわね・・・脳震盪起こしてなきゃいいんだけど。
３０分後和達が来るわね・・・そしたらゲームの始まりよ。
うまくコマを動かせたら・・・・どうなるかしら？
自分で思っていた通りに動く・・・・自分にはとても面白い事だと感じてしまい思わず頬が緩んだ。

１８話　罠に掛かった兎（後書き）

もうヤル気が無くなって全部消そうかと思ってしまいましたｗ（笑
だけど頑張って仕上げたいと思います。頑張ります！

19話　落ちていく。深い、闇の中へ・・・・。

キィィィイイー・・・・・

「案外楽に開いたな・・・・」

一ノ宮さんが隣でぼそりと呟いた。

あたし・・・菊来紅葉は映画館に居た筈なんだけど何かいきなり一ノ宮さんに連れ出されて（詳しく言うと黒塗りの大きな車に乗って）大きな屋敷の前にいる。どこなんだろう、これ・・・。

「菊来さん、行こう」前に進もうとする一ノ宮さん。あたしは「えっ」と声をだす。まって。話と状況が飲み込めない。

「ちょ、ちょっと待ってよッ！」

「・・・？どうしたの」

「状況が飲み込めないんだけど・・・」

「・・・」

「おーい・・・」

一ノ宮さんは急に黙りこむ。そんに教えたくない事なのだろうか・・・ってもしかして泥棒でもするつもり！？それであたしを巻き込もうって訳なのかな！？うーん・・・でも一ノ宮さんって泥棒とかする程お金に困ってそうじゃないしー・・・・。どうなんだろ一体。

「ねーね・・・どういう事なのー？」

「うーん・・・行こっか☆」

「は！？えぇ！？何！？何なのッ！？」

一ノ宮さんはそれだけさらりと言ってのけるとスタスタと早足になった。あたしも早歩きで追いかける。

いつの間にかもう玄関・・・というかホールっていうのかな・・・多分ホールみたいな所にまで来ている。これじゃあ不法侵入ッ！？だよね！？あわあわと頭の中が不法侵入→泥棒→警察行き・・・という結果に辿り着いている。ぎゃー！ヤバイ！やば過ぎる！！！

「い、ち、の、や、さんッ！！」

この状況をどうにかしなければッ！！！というあたしの懸命な態度によって一ノ宮さんは救われるのよ！（↑違う

泥棒行為を止めようと大声で呼びかける。意外にも一ノ宮さんは驚いた顔をしてあたしの方を振り向く。

「わっ！？静かにして！」

とか言いつつ自分も大声だしちゃってる癖に・・・、という事は口には出さない。

「とにかく・・・犯罪行為は警察行きだよ止めなさい今直ぐにッ！」

ふっ・・・決まった！！

ついでにカッコよくポーズも決めておく。

一ノ宮さんはポカン、と呆気らかんとした表情になった・・・と思ったのはほんの数秒で直ぐに笑い顔になる。

「はははっ・・・何言ってんの菊来さんっ・・・あはははは」

「な」何が可笑しいのよ、という前に一ノ宮さんが言葉を続ける。

「俺は別にこんな所に泥棒をしにきた訳でも変な事しにきた訳でもないよ・・・。俺の目的は、李玖を助け出す事」

「・・・はぁ！？？」

どうして此処に李玖が出てくるのよ、と言おうと口を開きかけふと止まる。

・・・そういえば李玖ちゃんが消えた時、天宮さんと一緒だった・・・。

「分かった？つまり光は李玖を拉致したんだよ。自分の都合の為に、ね・・・全く昔っからあいつは欲が強くて・・・」

ぶつぶつと愚痴り始めた一ノ宮さんはまるで子供の様だった。
いや、何ていうか子供なんだけどいつもの何考えてるか分からないそんな一ノ宮さんじゃなくて・・・そう、もっとこう・・・子供らしい無邪気な感じだ。
何か、可愛い。
そう思いつつも口には出さず歩く。
「一ノ宮さん」
「え？」
「天宮さんの事好きなんだね～」
「・・・・・・・・・え！？はぁ！？」
「何となく☆」
一ノ宮さんはあたふたとし始める。何か今日の一ノ宮さん面白いなぁ・・・。これは先刻教えてくれなかった仕返しでいっか・・・。

そんな事をしながらも大きな扉（どれも大きいけどこの扉の方が少しだけ大きい様な気がする）の前にきて一ノ宮さんはピタリと止まる。あたしもつられて止まる。
「？」
「此処だと思うんだけど・・・」
「此処なの・・・？李玖が居る所」
「うーん・・・多分居ると思うんだよね」
そういえば何処か知った様な足取りだった。一ノ宮さんは何故此処が分かるのだろう・・・？此処はもしかして、じゃなくて絶対、

そう考えていた時、バターンッと勢いよく扉が開く。近くに居た一ノ宮さんが扉に顔面を打つかる。
「っ！？」
「いらっしゃーい☆不法侵入はいけない事だけど貴方達だから特別許してあげるわ～・・・って和、大丈夫？」
出てきたのは天宮光さんだった。

「お前絶対わざとやっただろ・・・」
「え～？何の事～？？？」
「で、李玖は何処？」
一ノ宮さんが急に話題を摩り替える。天宮さんはふふ、と鼻で笑ってあたし達の方を手招きした。
「まーとりあえず私の部屋に入って頂戴」
てくてくと警戒心０であたしは部屋に入る。意外にも予想していたド派手な部屋とは違って、シンプルで落ち着いた部屋だった。白いベットに白いカーテン。白い床に白い壁。家具はタンスと本棚と机位・・・。
一ノ宮さんによると天宮さんが李玖を拉致したらしい――――が。部屋の何処にも李玖は居ない。と、一ノ宮さんは口を開いた。
「何処にやった？李玖を」

静かな沈黙。腕時計のカチコチという音が機械的に響く。

「何処へやったと思う？」
「おまっ・・・ふざけ」
「だーかーらー本当に知らないのよ――――。だから賭けをしない？」
「か、賭けぇ？」行き成り出てきた言葉に驚き思わず声が出てしまった。どうして賭けになるのよ、と言いたいが真剣な表情なので言葉を飲み込む。
「そう、賭け。李玖ちゃんはきっとこの屋敷の何処かに居るわ。で、李玖ちゃんを探し出して見つけたら和達の勝ち。その時は李玖ちゃんを返すわ。で、負けたら――――」天宮さんは一旦言葉を切り、続ける。
「李玖と結婚させてもらうわ♪期限は一時間」
「え・・・」「ちょっ・・・」
「じゃーやるわよぉー私はこの部屋で待ってるから。３，２、」
「なっ・・・選択権はないのッ！？天宮さん！！」

「無い♪」
「え」
「1，0――――！」
0、と言った瞬間に天宮さんは隣の壁に寄りかかる・・・と思ったら床がパカッと開いた。
言うまでもなく落ちていく。深い、闇の中へ・・・。

１９話　落ちていく。深い、闇の中へ・・・。（後書き）

もうすぐ最終回？なのかどうなのか（え
書き方なんとなーく変えてみたというより修行しました。一話と比べてみると全然違いますよーｖやっとド素人→素人になったのかなー笑（いや、前よりも見にくくなってるかも涙
そういえば菊来さん視点は楽しい事に気づきました。変えちゃうか主人公（おい
それにしても天宮さんのキャラが回を越す事に我侭＆やばいキャラになっていく・・・天宮さん暴走中。読者の方で着いていけなくなった方、気分が悪くなった方はすぐに読むのを止め、外の新鮮な空気をたくさん吸いましょう。

＆この回を待ち続けてくれた人へ（居ないか・・・
本当に御免なさいそして本当に有り難う御座います。
やる気が無くてだらだらと過ごしていましたが、書いて見た方がいい！という訳でイッキに書き上げました。何か楽しかったです（^ー^＊
それで消そうか消さないかと思っていた時に「頑張ってください。応援しています」の感想（？）をくれたＢＯＢＯさん、励みになりました（嬉涙
でもってアクセス数が本当に多くて（自分的）に待ち続けてる人がいるのかもと思いとても励みになりました。

最終回まで頑張りたいと思った自分でした（＆次回からもっと早く更新したい笑

お知らせ＊リレー小説感覚で小説をまた別に書いています。（名前違いますが涙）

よければ見ていって下さいませー暇つぶしにどぞ。因みにペンネームは蜜月(みつげつ)です。

「ありきたりな僕等の。」　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１３６１ｅ／

感想はＳｔｒｉｋｅ！とまた別にお願いします。（愛のキャラが菊来さんと被ってそうな気が・・・涙

２０話　どうせ嘘なら最後まで、

何処に居るんだろうッ！？

あたし・・・菊来紅葉（きくらいもみじ）は騒がしく長い廊下をバタバタと駆け回っていた。同じ風景をもう何度も見ている気がする。
一ノ宮さんと2手に別れて駆け回る。
もういい加減見つかってもいい気がする。
酸欠状態一歩手前になりながらも走り続けた。

だって、負けたら天宮さんのお嫁に・・・！

それだけは嫌だ！、と走り続ける。
そういえばどうしてこんなに頑張るんだろう。
だってそんなに大切でなければ他人（ひと）の人生なんかどうでもいいものだと思う。
親友だから？
自分で思った答えにチクリと胸が痛む。

――――違う？でもそうでしょう？

自分の心の中から誰かが語りかけてくる。

そうだけど、

――――そうだけど？

何かが違う。

――何が？

・・・何がだろう。分からない・・・でも違うの。

――分からないなら違わないでしょう？

そうだ。そうだけど違う。李玖が《好き》だ。大切だ。

――《好き》って親友の？

親友の《好き》・・・・？

――だって親友でしょう？

違う、これは・・・・・

異性に対しての《好き》だ。

あたしはただ走った。

＊＊＊

頭がぐらぐらする。

俺は殺風景な部屋に倒れこんでいた。腕時計を見ると先刻(さっき)の時間からは1時間程度経過している様だ。
それにしても何で此処に、と思った途端に鮮やかに記憶が蘇える。
俺は天宮に拉致されて、それで・・・・

それ以上難しく考えようとすると頭がキン、と耳鳴りがなった。
「痛っ・・・・・・」
・・・・・・とにかく抜け出そう。扉を開け長い長い廊下に出る・・・・と。

「紅葉？」
妙に息を切らした紅葉がいた。
「李玖・・・・・・・ッ！」
「どうした・・・？何か凄い顔だけど」
紅葉は見ての通り泣きそうな顔になっている。何か放っておけないし此処から脱出したいので駆け寄ろうとした・・・が。

ぐいっ

首根っこが掴まれ後ろの方へ引き寄せられる。と、思ったのは数秒で手首を掴まれた。

「！？」
何が起こったんだ、と思い後ろを見ると天宮さんがにこにこと笑いながら立っていた。何か恐ぇ・・・。
「天宮さん？」呼びかけても返事はしない。逆に紅葉に向かって呼びかける。
「時間切れね・・・ゲームオーバー」
「えっ」紅葉が驚いた声を出す。俺も驚いたが、よく意味が分からない。ゲームオーバーって何が・・・というか掴まれた手を離してほしい。
「約束通り李玖ちゃんと結婚するわね♪さ、行きましょ李玖ちゃん」
「はぁあああッ！！？？？？」
俺は思わず大声を出す。な、何だそれ・・・。
「だってぇ―――約束しちゃったのよぉ約束は守らなくちゃいけないのよぉ～～～」
天宮さんは行き成りブリっ子口調になって体をクネクネとさせる。は、はっきりいって気持ち悪いな・・・。
「約束って・・・天宮さんそんな事してない・・・いや、してたけどさ選択権無しでしたとは言わないッ！大体数秒か数分程度位いいじゃないッ！」
「駄目よ駄目よ―――。そちらが私の部屋に来る位時間はいくらでもあったんだからやりたくないという余裕はあった筈だわ。李玖ちゃんを探してるって事は参加したって事よ・・・それに、」
「こっちは李玖ちゃんを探しにきたんだから普通は探すわよッ！この×××の×××××ッ！」
「な、何が×××の×××××なのよッ！？」
「×××××でしょ充分×××の×××××よッ！！」
「紅葉ちゃんこそ充分×××××の素質があると思うけど？人の事いえないわよぉ―――」
「天宮さんこそッ」
ピーピーピーーーピーーーピーーー

すでに禁止用語の枠を超えた争いが始まっている。（というか俺と天宮さんが結婚する事前提で話が進んでるのに異議有りなんだけど）俺の耳がおかしくなる程俺の目の前で禁止用語が飛び交う。はっきりいってうるさいから違う場所でやってほしい・・・。（これって公害なんじゃ・・・）

「李玖ッ！」

頭がキンキンするのでその場に座り込んでいると一ノ宮が俺の方に走ってきた。

「ぎゃッ！」

「ぎゃッとは何。ぎゃッとは・・・。それより大丈夫？」

「や、大丈夫だけど・・・。違う意味は大丈夫じゃない・・・」

と、目線をピーピー禁止用語で言い争っている二人に移す。

「あぁ・・・凄いね・・・」

一ノ宮さんは呆れる様に言い争う二人を見つめる。そして低い声で、

「光」と天宮さんに言う。ビクッと動揺した様に天宮さんの肩が震える。

「何」

「我侭な事はもうよせ。見苦しい」静かな声で・・・・それだけ言う。天宮さんは弾かれた様に一ノ宮さんを睨む。

「何よッ・・・・！あんたに言われる筋合い無いわ・・・。あんただって・・・・ッ」途中から声がか細くなっていく。同時に天宮さんの瞳が潤む。

「お前は何がしたいんだ？人を困らせたいのか？」一ノ宮のいつものふざけた様な口調ではない。真剣だ。

「和だって困らせてるじゃない・・・私を・・・。私、和の為にこうなったのよ？」

「分かってる」

「いつも気づいてる癖に。挙句の上には違う人を好きになって・・・私、馬鹿みたい・・・」

え、待って思考あ追いつかない。ぐるぐると回る言葉を黙って聞く。
「分かってる・・・御免な」
「誤らないでよ・・・李玖ちゃんの事私は利用しようとしたのよ？和は私に興味が無いみたいだから和の興味がある李玖ちゃんを利用しようとして、」ぽろぽろと涙が天宮さんの頬をつたる。
「御免・・・」
「だからッ・・・！」
「有り難う」
「・・・っ！」
一ノ宮がぽんぽんと天宮さんの頭を撫でる。ま、まてこれはどういうシーンだおい。
つまり天宮さんは一ノ宮にかまってほしくて俺を利用しようとした訳か・・・。
「でも俺はさ、」
「何・・・」すっかり大人しくなった天宮さんを見た後しゃがみ込んでいる俺の腕を引っ張る・・・と、頬に柔らかい触感。
「李玖の事が好きだから☆御免な？」
「「「え」」」三人揃ってハモる。
「離せ変態ッ！いっぺん死んで来いっつーのッ！！」
俺は一瞬固まったが一ノ宮の腕を振り払い一ノ宮にドロップキックをかます。
「痛っ・・・いいじゃんか～」
「よくねえっつのッ！！地獄に落ちろッ！！」

俺と一ノ宮が色々騒いでいる間紅葉がすっかり落ち着いた天宮さんの隣にススス・・・と寄った。
「大変ね・・・天宮さんも・・・」
「大変よ・・・。今日は血祭りね♪」
さらっと恐いな・・・、と紅葉は思ったが苦笑いを浮かべ話を受

け流した。

＊＊＊

何はともあれ、何とか一件落着して、夜。
もう時間は夜で俺は風呂とかご飯とか食べる前にベットにダイブした。
それにしても頭が痛い。それにキンキンと激しく耳鳴りもする。
それは天宮さんの家でもあった事だがその時は軽く痛い、だった。
それなのに今は比べ物にならない程痛くて、くらくらする。
痛い・・・・。
耳鳴りが凄くする・・・・・・。
俺の意識はだんだんと遠のいていった。

２０話　どうせ嘘なら最後まで、（後書き）

話についていきない方すみません＾＾；
中々話が進まない涙

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4381d/

Strike!

2011年1月2日14時08分発行